

2019年度 韓国視察報告書

YEC（若者エンパワメント委員会）



はじめに

この報告書は、私たちYECが「民主主義」をテーマとして韓国で視察を行い、11か所の団体、施設を訪問し、その取り組みや思いについて、インタビューした記録をまとめたものです。

韓国は、2016年の「ろうそくデモ」などをきっかけに若者が社会に参加し、自らの意思を示すという社会の変化がありました。また若者に限らず、韓国では市民運動も活発で、その中で若者を取り巻く問題を解決しようとする試みが多く行われています。

また日本と韓国の若者を取り巻く状況は、よく似ている部分があるように感じています。新自由主義の流れをくんだ競争社会であること。大企業への就職や安定した公務員を志望する若者が多いこと。自分の意見が言える活発な若者が社会から求められがちなこと。そして、引きこもりやワーキングプア状態の若者は「社会不適合者」とみなされてしまう状況。こういった環境の中で、今の日本ではどうしても社会に対して諦めがちな雰囲気があります。一方、韓国では若者が声をあげ、それが実際に政策に反映される動きも出てきました。

是非この報告書を読んでいただいて、今の社会の在り方や民主主義とはいったい何なのかについて考えていただければと思います。

現在の日韓両国の関係は、残念ながら良い状態とは言えません。そんな中、私たちを快く迎え入れてくださった視察先の皆様をはじめ、今回の視察に協力していただいたすべての方に感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

視察概要

◆ 視察の目的

- ・韓国には、若者の権利を守るどのような施策や法律があるのか学ぶ。
- ・現在どのような問題が韓国の若者を取り巻いており、若者がどのような状況であるのかを知る。また、諸問題の解決を目指すために若者自身がどのような活動をしているのかを知る。
- ・韓国の私たちと同世代の若者が社会に対してどのようなことを日々感じているのか、また社会とどのように関わっているのかを対話を通して学ぶ。
- ・実際によりよい社会をつくるために活動している方々との対話を通して、YECメンバーひとりひとりが民主主義や今の社会問題について改めて深く考える機会を持つ。

◆ 視察の概要

◇ 期間

2019年9月2日(月)～9月6日(金)

◇ 参加者

網谷照世 (YEC、2年)

大谷好恵 (SSS、2年)

大林采奈 (YEC、2年)

森友理子 (YEC、2年)

油谷彩夏 (YEC、1年)

関文菜 (YEC、1年)

※YEC：若者エンパワメント委員会

SSS：静岡学習支援ネットワーク

西尾圭織 (YEC、1年)

松本成海 (YEC、1年)

森俊輔 (YEC、1年)

八木健斗 (YEC、1年)

保岡治樹 (YEC、1年)

◇ 訪問先・日程

9月3日 (火)	<ul style="list-style-type: none">革新パークソウル市青年政策ネットワークハジャセンター中央大学の学生との夕食会
4日 (水)	<ul style="list-style-type: none">青年ユニオンミンダルペンイ住宅共同組合青年ハブ無重力地帯ヤンチョン
5日 (木)	<ul style="list-style-type: none">5・18民主化運動記念館民主の家 (朝鮮大学の学生との座談会)光州青年センターthe森

革新パーク Seoul Innovation Park





日時：9月3日（火） 10時頃～

場所：ソウル特別市恩平区統一路 684

先方：パク・ジョンインさん（ソウル革新パーク 支部長）

当方：通訳・大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：82 2-389-7512

メール：<mailto:info@sehub.net>

HP：<http://innovationpark.kr/>

Facebook：<http://www.facebook.com/seoulinnovationpark>

概要：革新パークでは大きく分けて二つの目標を掲げて活動をしている。一つ目は「市民と革新者がつながること」である。普段の生活においてあまり交わることのない市民と革新者、この二者が革新パークを通じてつながっている。二つ目は「さまざまな社会問題を一緒に解決するために、経験を共有し実験を行っていくこと」である。革新パークでは一般市民に対して特別な学びや体験ができるような革新的な公園や市や区が主催するフェスティバルなどを開催している。

施設概要：革新パークは2015年に当時のソウル市長パク・ウォンスンさんによって建てられ、独立性をもって自然エネルギーを活用した施設である。一つの施設の中には様々な団体が入っていて、全部で250のチーム、総勢1600人が働いている。(一部はボランティアである。)集まったそれぞれの団体が協力しながら企画を実行していく。この企画は公募によって決められる。法律上、最長の入居は5年までと決まっている。しかし、その団体が持つ企画によっても企画を実行するまでにかかる時間は変わってきてしまうため、今も検討中だという。

設立の背景：革新パークは元々ソウル市が管理している疫病研究センター（1960年設立）だった。当時、疫病研究センターの跡地に何を建設するかで、ショッピングモールや大学など様々な候補が出た。そんな中、2011年にパク・ウォンスンさんがソウル市長に当選した。彼は疫病研究センターの建物をそのまま残し、革新パークを建設することを提案した。2013年～2014年には仲介組織が動き始め、そしてパク市長によって2015年に革新パークが設立された。

活動①：社会革新の実例

1.女性安心宅配

近年韓国ではフェミニズム運動が活発となっている。その中でも韓国社会では女性が宅急便を受け取ることが不安や恐怖を覚えているという現状がある。そこでソウル市が主導で無人の宅配受け取りロッカーを人がたくさん住んでいる所に設置した。このロッカーは暗証番号を入力すれば宅配便を受け取ることが出来るようになっている。

2.三世村

韓国、特にソウルでは隣に住む人とのコミュニケーションの減少が問題になっていた。その問題を解決するために共同の畑を作って一緒に耕したり、まちの住人会館を作り、その会館を運営することによって人々の繋がりを作るまちづくり活動を行っている。

3.自転車共有システム（約束の自転車）

捨てられてしまう自転車が多いということから、自転車を所有するのではなく、駐輪できる場所を増やして自転車を共有して使えるようにした。

4.犯罪予防デザイン

犯罪が起きやすい場所にLEDライトをつけ、受話器を取るだけで警察につながる電話などを設置した。

活動②：クリキンディセンター（『一番小さいハチドリ』という意味）

1.農園と料理教室

革新パークの中にあるクリキンディセンターでは農園や料理教室などの施設がある。料理教室では2年間を通して19歳～24歳の青年たちが自立を目指して学ぶ。青年たちが自ら育てた野菜などを使って料理を作り、施設の人にふるまうのである。青年の現在だけでなく将来を見据えた政策が行われている。それぞれの場所でそれぞれの役割を果たす、自分の力量を強化するということを大切にしている。

2.中古玩具

玩具のアップリサイクリング(もともとの形状や特徴などを活かしつつ、古くなったものや不要だと思ったものを捨てずに新しいアイデアを加えることで別のものに生まれ変わらせること)を行っている。また子どもたちに玩具の解体や玩具を使った体験など様々な機会を提供している。

活動③：写真を使った心のケア」

「写真を撮る」ということを通して国家から拷問を受けた人への心の治療がなされている。自分が写真を撮ってみることで撮る喜びを感じたり、自分が心ゆくまで好きなように写真を撮ったりすることが大事だという。

写真を通しての発信

「発展途上国」や「貧困」から脱却した写真を撮ることによって、その現場の違った側面を写し発信することを大切にしていこうとする活動である。例えば、「北朝鮮」といえばあまり若者がお洒落な服を着て歩いているイメージがないが、彼らがお洒落な服を着ている写真を撮影することによって、私たちが抱いている彼らに対する固定観念を取り除こうとしている。

活動④：ソウル記録院の設立

革新パークの中には「ソウル記録院」といわれる資料館がある。ソウルでは急速な都市開発によって街のほとんどが取り壊されてしまった。この施設はそんなソウルの過去を全て記憶し、未来の世代に伝えていくための施設である。ソウル記録院は公共機関で作成された記録だけでなく、市民も協力して収集・作成されたものである。

質問 (Q&A) :

Q.入居者が1600人いると説明されていたが、彼らはここにずっと住んでいるのか？

A.そうではない。居住者としてではなく事務所として利用している。

Q.色々な事例（約束の自転車など）が挙げられていたが、1つの事例に対しておおよそどれくらいの時間を要するのか？

A.団体によって持っている課題が色々あるのでかかる時間は様々。団体は公募で募集する。それぞれの団体が持つ課題や社会革新的課題を審査したうえで応援しながら解決していく。

多様であるため平均してどれくらいの時間を要するかは分からないが、そもそも平均にすること自体に価値はない。現在もなお、審査中の団体がいくつかある。

Q.入居者はボランティアとしてこの施設に入居しているのか、それとも給料をもらっているのか？

A.大部分は労働者である。場合によってはボランティアを募集する団体もある。

感想・所感

私は、革新パークを視察して主に三つのことが印象に残った。

一つ目は、団体同士での「つながり」を感じたということである。革新パークの中にあるクリキンディセンターでは、青年自らが農園で野菜を育て収穫したものを使って料理教室を開き、料理を施設の人に提供している。これを聞いて、私は一つの施設の中でそのようなサイクルができていることがとても素敵だなと思った。また、このことがコミュニケーションにつながっていくのだと感じた。

二つ目は、韓国の青年をはじめとする韓国の市民が常に問題意識を持っているということである。「捨てられてしまう自転車が多いからシェアサイクリングを行う」、「犯罪が増えてしまったから防止する」、「労働者の権利が守られていないから支援する」などというように常に問題に対して、みんなで解決策を模索しているように感じた。今の社会を当たり前だと思うのではなく、「これはおかしいのではないか」、「もっとこうしたほうがいいのではないか」というように、市民が常に問題意識を持って解決を目指していることがすごいと思った。

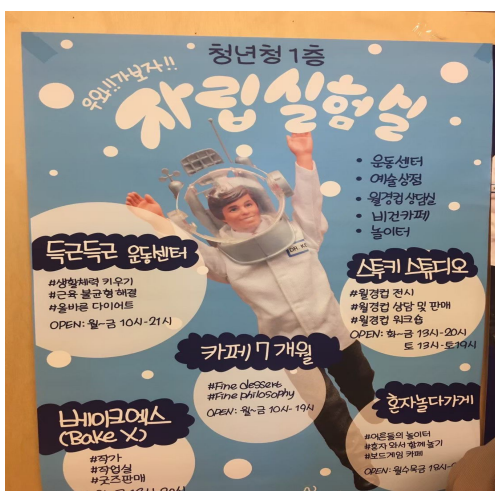
三つ目は、ソウル市が市民に親身に寄り添っていると感じたことである。日本では、革新パークのような複合空間に対して馴染みがなく、ためらい感じてしまう人が多いように思う。それに対して革新パークでは、誰でも気軽に訪れることができるような公園があるなど、民間にかなり打ち解けているように感じられた。このような施設が存在していることで、誰もが入りやすいと感じられ、支援を受けることへの偏見や抵抗が軽減していくのではないかと思った。

一方で革新パークの中にある団体は広く世間に知られておらず、自ら調べることによって「このような団体があるのか」と知る場面があった。そのため自分から団体について調べていくことが大切であることが分かった。

油谷彩夏（静岡県立大学国際関係学部 1年）

ソウル市青年政策ネットワーク





日時：9月3日（火） 14時頃～

場所：ソウル特別市恩平区統一路 684 22棟

先方：キム・ヒソンさん（ソウル市青年政策ネットワーク 共同運営委員長）

当方：通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：+82 2-2214-9426

メール：seoulyouth2030@gmail.com

HP: <https://seoulyg.net/about>

概要：ソウル市青年政策ネットワークは、ソウル市の青年たちの問題を一緒に話し合っ解決しようとする、ソウル市に住んでいる青年、もしくはソウル市に通っている青年の住民参加意思決定機構である。様々な人が参加している。会社員・フリーター・学生など19~39歳までの青年が活動に参加している。実際に会って会議に参加するオフライン会員が約700人、オンラインで意見を寄せたり注目したりして活動を支えるオンライン会員が約300人いる。

青年に関する問題を青年自身が関わりながら解決に取り組める施設である。青年の声が反映された政策をつくることを目的として、青年政策の担当組織である「青年庁」を設立した。

施設概要：2013年に設立。ソウル市革新パーク内で活動中。青年庁は、世代間の連帯を図る世代共存や青年も積極的に議論に参加できる青年自治、未来の社会にも対応できる人材をつくる未来革新を実現することを

目的としている。青年に関する政策の企画・予算編成・執行までの全過程を主導する組織であり、当事者である青年の声が反映された青年政策を実施することを目的としている。

設立の背景：もともとソウル市の中で青年のための支援や政策をサポートする青年政策課が「青年庁」という名前で拡大した。青年庁と青年政策ネットワークが連携をして仕事をしている。これには青年が新しい時代の流れに対応していくために、青年たちが自ら運営に関われる機構を用意するという目的がある。

未来に対応するための課題としては、環境問題や男女間だけではない様々な形態の結婚の権利、核家族化や単身世帯などがある。今までは政策の前提として4人家族を想定していたが、今日では単身世帯を政策の対象としていかなければならないと話している。

活動：活動は一年単位。去年と今年の活動の違いは、青年自立予算制度というものを初めて試験事業として取り入れたこと。青年が直接予算を策定する。

現在は主に以下の6つの活動・政策が行われている。

1. 青年自立予算制度
2. 世代間均衡革新プロジェクト
3. ソウル市青年委員15%目標制度
4. 青年インセンティブ制度
5. 青年認知予算制度

1. 青年自立予算制度

当事者である青年が主導して青年問題を解決できるように、ソウル市の予算を議会と青年が一緒になって決めるという制度である。

若者自身が作った政策を市に持ち込み、青年議会を実施できる仕組みもある。

2. 世代間均衡革新プロジェクト

急変する社会の中で新たに生まれる未来の問題を、誰よりも早く感知する青年たちがいる。既成世代が認知できない問題を、青年が直接発掘・対応していくことができるよう、政策とビジネスをつくる革新的なプロジェクトを立ち上げる。

3. ソウル市青年委員15%目標制度

ソウル市は、環境、デザイン、情報通信など、200以上の分野に委員会を設置し、市民委員が協議・審議・議決を通じて、ソウル市における重要な決定を下している。ソウル市の青年人口は約31%にもかかわらず、満39歳以下の委員は全体の4.4%にとどまっており、この割合を3倍以上高め、青年が15%以上参加する委員会を開く。青年の視点と立場がより良く反映されたソウルをつくる。

4. 青年インセンティブ制度

ソウル市が実施する様々な事業に多くの企業や団体が参加しているが、キャリアが短い、または規模が小さい青年起業の立場からすると、企業のキャリアや実績を重視する選定基準に押され、チャンスすら与えられないというのが現状にある。これからは可能性を優先して考え、実力と才能のある青年企業、青年団体がソウル市政のパートナーとなれるよう、敷居を下げる。

5. 青年認知予算制度

ソウル市が繰り広げる全ての取り組みの結果は、未来の世代の日常に大きな影響を与える。現在の市政運営の方向が未来の世代に不利に働かないか、より持続可能なソウルのために考慮すべき政策の優先順位は何か、青年世代が重要に考える価値が反映されているかを考慮し、ソウル市の予算を編成することができるよう、青年からの意見を聞き、反映させる。

質問 (Q&A) :

Q.市が若者に対してどの程度協力的であるか？

A.全ての側面ではないがある程度協力的である。しかし最初から市が若者に対して協力的というわけではなかった。

このソウル市青年政策ネットワークが作られたのは2013年で、それまでに色々な取り組みがなされ、今の仕組みができた。まずは市長が変わり、さらに市民運動で活躍してきた人たちが結集した。彼らがそれぞれの分野で議論を重ねて徐々に力がついてきた。

Q.自分（質問者）の中で「若者」というと10代後半のイメージする。19～30歳と聞いて、若者の認識の幅が広いと感じた。

A.韓国では青年と呼ぶ。青年とは、年のとった人が若い人たちを指して青年という。就職を支援するために「青年雇用促進特別法」という法律があり、法律的に青年の歳を規定すると34歳までが若者と定義される。その理由としては、例えば労働や住居など年ごとに問題になるトピックが変わるため、年齢を拡大しすぎるのも、別の異種まで取り込んでしまう可能性があるため、話し合う余地がある34歳までが基本になっているからだ。しかしこの団体の対象を39歳までにしたのは、最大限多くの青年たちを対象にしようとしたためである。

また政策や事業によって、青年の年齢の範囲の定義が違う。例えば、青年手当では手当の対象が去年までは29歳までで、今年（2019年）から34歳までに拡大された。しかし、青年の対象が雇用や就職だけを考えた者であったため、福祉の側面では見えないところが多かった。例としては青年の権利について保証することや、政府のやらなければならないことの保証の範囲などがあげられる。これらに対してソウル市は地方自治体に事業を委託することで手を打った。韓国の国会では青年基本法が提出されたが、いまだそれ以上の進展はない。また、韓国の地方行政ではそれぞれ、青年に関する基本法が制定されている状態である。

Q.青年自立予算制度のことで、青年市民委員会の役員はネットワークか

ら選んでいるのか？

A.誰かから選ばれるわけではなく、自分から手を挙げて、一度研修を受ければ誰でもなることができる。基本的にはネットワークに参加している市民である。

Q.映像を視聴して、元気な青年が多いと感じた。(病気な人やマイノリティの人、引きこもりの人など)見えない人たちの意見や当事者性をどのように確保しようとしているのか？

A.実際、自分たちも活動をしていく中で、このことを課題としてとらえている。現在、ソウルの人口は約300万人だが、政策を進めるにあたって阻害されてしまう青年もいる。今年は、初めてオンライン青年政策パネルを募集した。そしてソウルは大きな都市だが、区単位で意見を言えるような構造を今つくっている。実際、引きこもりに支援しなければいけないという話があり、2019年初めて引きこもり対象の政策提案が必要だという声が出た。そのため、今後引きこもりに対する支援予算が下りると思われる。

Q.ソウル市以外の地域では青年のためのどのような政策を行っているのか？

A.2015年にソウル市青年基本政策ができて以来、他の地域からソウル市の青年政策の動きを取り入れようとする動きが盛んになってきた。最初は地方で活動している青年活動家たちが、青年たちと交流を始め、それが発展して2017年に全国青年政策ネットワーク会議を作られた。そこでは青年基本法の問題を議論するなど、全国の青年たちの課題であるとしてソウル市だけでなく、全国の青年政策ネットワークが扱うようになった。他には共同でフォーラムや会議を開いたり、自治体とかそれぞれの地域で政策を進めたり、どのようにすれば進められるか、を交流を通じて進めている。日本では司法の政策がどうなっているか分からないが、韓国で、中央集権でソウルに委曲集権しているから、ソウルのよい事例が全国に発信されている。

Q.韓国人は政治にあまり興味を持っていないようなことを友達が言っていた。私は、韓国人は少なくとも日本よりは政治に興味を持っていると思う。しかし、外国と比較したとき韓国人の政治にかなり関心がないという印象を持たれていると聞くが、実際はどうか？

A.活動家の急激な高齢化、市民の積極性の欠如、低い投票率などをみると国民の政治への関心の低さを感じられる。しかし積極的に政治に参加しようとしている人たちがいる状況を見ると、自分たちが参加することで変えることができるという意識があるのではないかと思う。私の考えでは、日本人の中には政治に対して無気力感を感じる人が多いイメージがある。一方で韓国人は、政治は変えられると考えているため、デモに行くし、実際デモに行けば変化を起こせる。実際にソウルでは、市民が自分たちの力でパク市長という立派な指導者を選択したことで行政を良い方向に変えることができた。この政治に対する成功体験から、多くの市民が政治に参加してみようという気持ちに変化した。それ

が効能感、行動を起こすことに意味があるんだ、ということに繋がっているのではないかと思う。

Q.ソウル市長が変わったことで、若者の活動を応援するような施設ができたと思うが、将来的に市長が変わって活動の風向きが変わり、政治が上手くいかなくなる可能性がある中で、もしそうなった場合にどのような対策をたてるつもりなのか？

A.一つは「青年参加活性化条例」という青年たちが政治に積極的に参加することを促進する条例を作ろうと努力している。ソウル市には住民参加予算というものがある。住民の訴えに対してソウル市が許可を出した場合、住民たちが主体的に事業を引き受けることができる制度を6年前から行っている。しかしこのようなことを政策の流れに関係なく、住民は主体的に行政に参加できる基盤をつくった。また、ソウル市の政策が変わってしまったとしても、市が権限を区に分配し、区単位で事業を継続する対策はある。あとは市、町だけでなく市議会との関係、市議会の体制が変わり、大きく政策を変えようとする動きが起こっても、政策がしっかり安定するようなシステム構築、市長と国会の関係又は役所との関係を構築しようというシステムを作り上げる方法もある。もちろんこれは100%保証できるものではない。

Q.ソウル市は、青年自立予算にたくさんお金を使ったり、若者政策で青年主体の政治をしていると思うが、それに対して青年以外の人はどう思っているのか。

A.分野によって違いがあるかもしれないが、予算というものは限定されたもので限界がある。状況によっては競走の対象になったり、協力したりする。全体的には困難な状況にある青年たちを支援するという考えにまとめられている。しかし若者たちが主人公になって何かをやるというのは、まだ時間がかかると思う。例えば青年の健康問題を見ると、日本も似たような状況だと思うが、10、20代の死亡原因1位が自殺である。過労や過度の勉強、ブラック企業の存在などによって心の健康が損なっている人がたくさんいる。年配の世代にとっては、若者を主人公として捉えるより「私たちのときはもっと大変だった」という見方が多い。そう考えると、社会で共感体を作っていく必要がある。議員として出馬する若者たちは少ない。

Q.日韓関係があまり良くないというニュースを見て、正直来るのが不安だったが、韓国の人たちはとてもいい人たちばかりで、なぜこのようなニュースが流れているのか不思議に思った。

A.私たちの目指している民主主義、人権は国家レベルを越えてお互いに交流を深めなければならない。私たちはこのように遠くから来てくれることに感謝しなければいけないと思う。日本人は受け付けられないなどの差別は一般的にはない。一方で日本で韓国を受け付けられない雰囲気が存在していることに不安を感じている。

Q.日本で韓国のことをあまり良くないイメージで報道されているが、韓国では日本のことがどのように報道されているか？

A.例えば韓国では8月15日の終戦記念日を報道する際に、日本市民を批判するのではなく、政治的にどういう動きがあるのかという事実を淡々と報道し客観的に伝えようとしているように思える。

また現在では、ファクトチェック（個人的にニュースの事実を探る）を題材とした番組が人気である。実際にソウル大学と韓国原論財団が、ファクトチェック研究所をつくった。

感想・所感

ソウル市青年政策ネットワークを視察して、政策を作っていく過程で若者の声を積極的に取り入れようとしている姿勢や市の若者に関する予算を若者自身に配分を任せるといった行動が、若者の力を信じていることだと思った。また、そのように行政レベルで若者の主体性を尊重し、若者は社会を作っていく主体であると認識されている環境ならば、若者自身が自分たちの手で、また自分たちの声で、そして自分たちの存在で社会を変えることができると実感できるだろう。青年自立予算制度のお話は「若者が自主的に社会の担い手として活動している」のではなく「若者が主体的に社会のつくり手として活動している」例としてあげることができる。

森友理子（静岡県立大学2年）

ハジャセンター



日時：9月3日（火） 16時頃～

場所：ソウル特別市永登浦区永信路200

先方：サンチェスさん(ハジャセンター職員)

当方：通訳：大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・

通訳、POCHI製作者)

網谷照世 (YEC、2年)
大谷好恵 (SSS、2年)
大林采奈 (YEC、2年)
森友理子 (YEC、2年)
油谷彩夏 (YEC、1年)
関文菜 (YEC、1年)

西尾圭織 (YEC、1年)
松本成海 (YEC、1年)
森俊輔 (YEC、1年)
八木健斗 (YEC、1年)
保岡治樹 (YEC、1年)

電話 : 02-2677-9200

メール : media@haja.or.kr

HP : <http://www.haja.net/>

Facebook : <https://m.facebook.com/hajacenter/>

概要 : 正式名称はソウル市立青少年職業体験センター。「やりたい事をして生きよう」をモットーにできた青少年文化スペース。ハジャとは、韓国語で「やろう!」という意味。

施設概要 : 2019年で設立20周年。地下1階から地上3階までである。建物には、ポップ音楽、映像、生活デザイン、ウェブ、市民文化アトリエ、ブックカフェ、小劇場などがある。ここを中心に青少年は様々な文化を経験し、自らの進路を選択することができる。年間約16万3000人が訪れる。去年は34の事業を行った。

設立の背景 : IMF経済危機で失業者が増加した。それ以来、韓国における若者の失業問題が続く。そんな中、1999年に未成年の若者が酒場の火事で死亡する事故(仁川仁ヒョン洞ビヤホール火災)が起きた。事件当時、酒場のオーナーは責任を逃れるためにトビラを閉めて青少年を出られないようにして逃亡したため、多くの若者が犠牲となった。この事件を経て「二度とこのような悲劇を繰り返さないように、10代の若者の遊び場をつくろう」という思いから延世大学文化人類学の教授・学生がハジャセンターを立ち上げた。ホンイク美術大学の学生の協力して、施設をデザインした。

ハジャセンターがある永登浦地区では、貧富の格差が大きい。70年代、80年代は中小工場で働く若者が増えたが、サービス業への転換によって変化が起きている。2008年にサブプライム危機がおき、青少年が社会的デビューを社会的企業とする動きがあり、社会的企業が起業支援するハブの役割も持ち始めた。また、2011年の東日本大震災を通して、持続可能な社会を目指すようになった。ハジャの中にあるフリースクールで自然の生態系を学んでいる。現在、延世大学はパートナー機関としてソウル市と協力して運営している。

活動内容:

原則・自分を高めよう。

- ・やりながら、学ぼう。
- ・問題を解決しながら、学ぼう。

- ・情報を共有し、発信しよう。
- ・Naming myself：自分を表現しよう。（名付けよう。）

ハジャセンターでは利用する全ての人たちが守らなければならない約束がある。

7つの約束

- 1 やりたいことをしながら、やらなければいけないこともする
- 2 年齢、性差別、学歴差別、地域差別、人種差別をしない
- 3 いかなる形の暴力もダメ
- 4 人に迷惑をかけない／自分のことは自分です
- 5 情報でずるいことはしない 情報は共有する
- 6 人の立場に立って考える 配慮と親切を心がける
- 7 約束を守る／守れない約束はしない

また、施設員、利用者全員がニックネームで呼び合うようにしている。これは韓国社会では、年齢や性別、肩書きによる上下関係にこだわる傾向があるため。ハジャセンターは様々なプロジェクトに取り組むために水平的（平等）な関係をつくる必要があり、それを「あだ名文化」と名付けた。

体験的な学び 5つの工房（Factories）

：「生活デザイン」「映像」「ポピュラー音楽」「インターネット」「市民文化」

創意性

フリースクール 具体的な体験と実践を大切にする。

3つの哲学

- ① 経験を通じて学ぶ
- ② 問題解決を通じて学ぶ
- ③ 自己主導的に学ぶ

以上、3つの哲学をもとに4つのフリースクールがある。

①ハジャ作業場学校

ハジャセンターの中で一番歴史が長い。

②錬金術師学校

韓国で初めての都市型のフリースクール。非認可で不登校の子どもたちを対象。

③ヤングシェフ

「オーガニゼーション料理」という団体が支援。

④ロードスコーラ

「トラベラーズマップ」という社会的企業が運営している。

ハジャ生産場学校は、ハジャセンターの中にある小さな実験的な学校である。不登校になった子どもたちのための新しい種類の「学校」であ

る。生徒数は1クラス15~25人、全体で100人以下で、最低3年間で卒業する。厳しいカリキュラムによって知識を詰め込む公教育機関と異なり、この学校では、自分に自信を持ち仕事のできる生徒を育てる。10代研究所の意見を青少年政策に反映し、年に一度ソウル青少年創意サミットが行われる。11回目以前は海外から講師を呼んでhajaの未来について討論をしていたが、それ以降は講師を呼ばなくなった。

また、ハジャセンターは食事を大切にしている。イベントの最後には必ず食事する。

ビカミング事業（10代研究所）

中学校、高校などを学校単位で申し込む。ワークショップは手や体を使う作業をたくさんする。それによって、創意性クリエイティビティを学ぶ。

2018年のハジャセンターの目標は

- ・未来世代のための進路プラットフォームを作る
- ・ITの時代で生き残るためにはどうするか
- ・労働のない未来で生き抜くにはどうするか

質問（Q&A）：

Qビカミング事業とはなにか？

A去年まで青年研究員はハジャだけだったが、国からファンディングを受け、国家との共同事業になった。

Q.韓国の職に対する価値観は？

A.韓国での大きな変換点はIMF危機だった。例えばIMF危機以前はSamsungに入社するのが1番のステータスで、Samsungの社員は自分がSamsungという一流企業に所属しているというアイデンティティが強かった。また仕事は一生の間に1つか2つというのが一般的だった。(基本的に終身雇用の形態であった。)

しかしIMF危機後、安全な企業はなくなり非正規雇用者が増加。韓国では3、4年の間で転職が一般的になったため、離職率が高まった。その背景には、今まで労働者は不条理なことがあっても我慢していたが、今は主張・離職して解決するようになったという労働者の考え方の変化がある。また、フリーターも増加した。韓国の社会では手に職をつけてもダメだと言われている。例えば美容師、コックになっても、それらの職業は社会的地位が低いため、なろうとする人が少ない。また親は子供に同じ仕事をさせないという風潮があり、子どもを高学歴にして大企業へ就職させたり、議員にさせたりしようとするケースが多い。そのため人々が就きたがらない職業の高齢化が進んでいる。

感想・所感

私はハジャセンターの施設見学をした時にとても自由な感じがして、どんな若者でも受け入れてくれるような温かさを感じた。この雰囲気はハジャセンターの原則や7つの約束によって保たれているのだと思う。規律やルールを作

ることでその場の全員が居やすい環境を作れるのだと感じた。7つの約束の1つに「やりたいことをしながらやらなければならないことをする」というものがある。私はこれはとても大事だと感じた。

やらなければならないことをせずに、ただ若者のやりたいことことをさせるだけだと、若者自身の成長につながらないと共に、社会が若者を受け入れてくれないと思う。若者が自分自身で自立・自律して社会で生きられるようにしているところがとてもいいと思った。ハジャセンターは若者が学びながら遊べる場所であり、若者と共に作って行く施設であると感じた。社会の背景や若者の変化に合わせて在り方が変わり、いろいろなことを行っていくのが素晴らしいと思った。

西尾圭織（静岡県立大学1年）

ミンダルペンイ住宅協同組合



日時:9月4日(水) 10時頃～

場所:ソウル特別市麻浦区白凡24、4階事務所

先方:チェ・ジヒーさん(ミンダルペンイ住宅協同組合 代表)

当方:通訳;大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世(YEC、2年)

大谷好恵(SSS、2年)

大林采奈(YEC、2年)

森友理子(YEC、2年)

油谷彩夏(YEC、1年)

関文菜 (YEC、1年)

西尾圭織(YEC、1年)

松本成海(YEC、1年)

森俊輔 (YEC、1年)

八木健斗(YEC、1年)

保岡治樹(YEC、1年)

電話:010-5421-1518 / 070-4145-9120

メール:minsnaunion@gmail.com

HP: <http://www.minsnaunion.net/>

Facebook: @page.minsnaunion

概要:ミンダルペンイユニオンは、若者が「一人暮らし=大変なこと」と、とらえている状態を当たり前のこととして目をそらすのではなく、社会問題として取り組む市民団体である。団体名の「ミンダルペンイ」は「ナメクジ」を意味しており、甲羅がある「カタツムリ」と対比して家のない若者を表している。そしてミンダルペンイユニオンは最終的な目標として、全ての若者が安心して暮らせる社会を実現し、ミンダルペンイユニオンが必要なくなることを目指している。

施設概要:青年ユニオンと共同の事務所。

設立背景:市民団体として若者たちの住宅問題の向上と政策提言を目的として2011年に設立された。

活動:主な活動は入居者たちの居場所、活動の機会の提供することである。現在青年ユニオンと同じ事務所で活動しており、2団体含めてグループ全体では職員は7名となっている。

韓国では20~30代の若者を取り巻く住宅問題が深刻な状況にある。家を借りるには保証金などを含めて100万円もの費用がかかり、若者が住宅を借りるには大きな壁がある。しかし多くの若者はそのような住宅問題を当たり前のことだと受け止めており、問題だと認識していない。ミンダルペンイは、そのような若者を取り巻く困難な状況を問題視し、課題の解決を目指して日々活動している。具体的な活動として、住宅を借

りるのが困難な若者に向けた「カタツムリの家」への入居相談、若者のネットワーク作りなどを行っている。

ミンダルペンイが運営する「カタツムリの家」では、月に一度入居者全員が食事会で顔を合わせよう、という唯一のルールがある。また、失敗や挫折が良くないとされる韓国社会において、カタツムリの家では入居者を「倒れても大丈夫、転んでも大丈夫」というスタンスで温かく迎え入れている。今ではカタツムリの家は入居する若者にとって、なくてはならない居場所であり、安心できる空間となっているだろう。

その他にも、カタツムリの家には「平等文化」というものがある。これは「年齢を考慮せず、楽に自分の話ができて、無理に家庭の事情を話さなくても良い」というものであり、居場所作りにおいて大切なことである。

質問(Q&A):

Q.1つのカタツムリの家は何人住んでいるのか？

A.家によって形が違う。大体ひとつの建物に12~14人だったり、20人ほど住んでいる家もある。形態も1人部屋、2人部屋の所があり、玄関を共同で使っている所もある。「オフィステル」と言ってアパート、マンションのような所もある。

Q.ミンダルペンイ(ナメクジ)という発想はどこからきたのか？

A.カタツムリでもみんな家があるのに若者達には家がない。だから若者たちはナメクジのようだと考えた。そのような若者たちで集まろうという思いで「ナメクジ組合(ミンダルペンイユニオン)」という名前にした。

Q.職員の話し合いの中で、団体名を決める際に、すぐにミンダルペンイ(ナメクジ)という発想が浮かんだのか？

A.団体名について話し合っているときに、初め「カタツムリ」という言葉が出てきて、話が進むうちに「ナメクジ」という発想が浮かんだ。

韓国にはロウソク集会などの大きな集会がたくさんある。その時にミンダルペンイユニオンの旗を持っていくと、まるで環境団体だと勘違いされる。でもこの由来について説明すると人々は納得してくれる。韓国では若者たちが若さを理由に社会に対して声を上げることに抵抗があり、若者が声を上げれば「若いのに生意気なことを言うな。」というような反応をされてしまう。青年問題はもともと「若者とはそういうものだ。」と言われ片付けられてしまうことがほとんどである。しかし今になってこれは本当に深刻な問題なんだ、ということが社会的に認識されはじめた。それを解決するために青年ユニオンやミンダルペンイユニオンなどのいくつかの市民団体があり、私たちの団体は社会に対して言いたいことを訴えられない若者、問題を抱えた若者たちの声を聞いて、代弁するという役割を担っている。

Q.ミンダルペンイユニオンと青年ユニオンは同じ事務所を使用しているが、何か具体的に一緒に活動しているのか？

A.まず行っている活動が似ている。しかし青年ユニオンは青年問題全般に関心を持っており、ミンダルペンイユニオンは、より具体的な内容として若者の労働、雇用などに関して関心を持っている。それら青年問題の中でも特に住宅問題が活動の中心にあるのがミンダルペンイユニオンだ。つまりミンダルペンイの活動の根幹には、まずは1番最初に青年問題があるということをお願いしたい。若者自身に青年問題の存在を認知してもらうことを目指し、その上若者の問題に取り組んでいるという点で青年ユニオン、ミンダルペンイユニオンは似ているといえる。青年たちの問題の実態を社会に発信することが難しかった時期に、雇用、住居などで若者にとって困難な事情があるということを出信していた。青年ユニオンも一緒に声を挙げていた。またいつも行政の中では雇用は雇用、家は家のようにして別のアプローチにしなければならない。しかし私たちが活動する時には家も仕事もみんなひとつに繋がってるんだという発想に至っていたため、行政と連携しながら活動を行っている。青年ユニオンで最低賃金を上げようとする動きを始める時には、私たちミンダルペンイユニオンも共に活動する。管理表や家賃の実態調査をする時には、青年ユニオンも協力してくれる。また若者対象の政策が生まれる時には、ともに記者会見を行ったり、政策の開発を行ったりしている。

Q.住居にカタツムリの家を利用する人は地方から来る学生がほとんどなのか？

A.都会出身者と地方出身者の入居者は同じ割合でいる。活動を始めた時、地方からソウルへやってくる人たちが多いため、やはり地方からの相談者が多いと思っていた。しかし若者の住居問題が深刻になるにつれて地方からの相談者以外にも、ソウル特別市近郊に住むが、勤め先までに時間がかかる若者・学生、また社会人になっても住宅問題を抱えている人々も多いことが分かった。ソウルに住む人たち、ソウルで仕事をしている人たちの中でもそのような問題が存在する。だから地方というよりもむしろソウルの人たちの問題、という部分がある。また最近では、カタツムリの家は、女性たちが最初に独立（自立）をする機会としてよく利用されている。これは女性たちが安全性を考慮するためである。

Q.カタツムリの家に入る前と入った後で、入居者の心情にどのような変化があるのか？

A.人によって違うとは思いますが、いい変化があった人の話を話すと、こんな話がある。

韓国社会では、「失敗しちゃダメだ、転んではダメだ」というふうに言われる。その理由は一度の失敗でも立ち上がれなくなってしまうからだ。しかしここに来れば「倒れても大丈夫、転んでも大丈夫。床にマットレスが1枚敷かれたような気がする。」と、そういうふうな言い方をしてくれる人がいる。だからお金がある人は食料品も自分で買ったり、ある人はだれかと共同で買ったりする。だから自分が仕事を辞めたとし

でも、共同で食品を買う場合には自分が働いている時にはちょっと多く出してあげて、自分が働いていない時にはちょっと食費を少なくすれば一緒に食べていける。そうすれば仕事を辞めた瞬間に食べ物がなくなるという状態がない。そういう意味でカタツムリの家での生活は彼らのマットレスになって、社会で失敗するリスク、プレッシャーを和らげている。

安全の面でも、韓国の女性はかなり危険に晒されていると言われている。デートDVなどがその主な例だ。ボランティアで、帰宅時の危険を予防するキャンペーン活動を行っている入居者の女性が話をしてくれた。

普通はセコムや防犯カメラをつけるなどの安全のための対策をする。しかしそういうものは全く意味の無いものだと言われ、彼女たちは認識している。彼女たちがとった方法は、バスの停留所で降りたら団体のSNSグループのようなものに、自分がバスを降りたことを連絡をする。すると散歩を兼ねて誰かが迎えに行き一緒に帰ってくる。そのような活動を何回か行っていたら、近くの現場をうろついていた変質者が居なくなったそうだ。だから多分その変質者も私たちの活動を見て「あそこに住んでいる人たちには手を出せない。」ということを感じたのだと思う。普通だったら自分のアパートの隣に誰が住んでいるのか分からない。しかしカタツムリの家は、もし何かがあったとしても、玄関までたどり着けば安心が得られる。

Q.カタツムリの家が多くの青年を救ってきたと思うが、これからさらにどんなことを目標にやって行きたいと考えているか？

A.カタツムリの家が出来て実際にそこに住んでいる人たちの環境がよくなったということはあると思う。ただカタツムリの家が唯一の正解だとは思わない。ただカタツムリの家が存在を通じて、一部の若者問題、住居問題が解決に向かった。このように青年住居問題を改善することが可能であるということを示しながら、想像力を広げていく役割が出来たと思っている。その意味で究極的な目標には、やはりミンダルペンイユニオンがなくなることがある。だからそういう制度的なもの、改革的なもののお話をしながら実際に安全で楽な気持ちで暮らせる共同体として、また市民参加の場としてカタツムリの家、そしてミンダルペンイユニオンというものが存在していれば良いなと考えている。

実際に制度改善だけでなく「平等文化」というものをとても重要に考えている。例えば平等文化には、韓国では元々ご飯を食べに行ったら一番歳の若い人が目上の人にお水をついだり、自分よりも年上の人に対し、「兄貴」「お姉様」などと呼び敬う文化がある。しかし私たちはそのようなことはしない。歳や出身地、学校などを大事に考えない。平等な話をしながら「君は今日どうだったの？最近何してるの？」と誰でも楽に自分の話を出来る環境を作る。このことを1番大事に考えている。

感想・所感

ミンダルペンイユニオンでのお話を通して、ソウルの若者を取り巻く住居問題が非常に深刻であるということを理解した。高額な家賃を支払えず、最低住居

基準を満たしていない劣悪な環境の家に住まざるを得ない人が少なからずおり、それに加えて厳しい就職活動、一度離職や挫折をしてしまうと社会復帰が難しい社会の状況が根底にあり、日本で私たちが体感しているよりもより苦しい思いを沢山の若者が抱えているのだということがひしひしと感じられた。

若者がこのような苦しい状態にあるのが普通だという社会の認識を覆し、多くの人に問題意識を広めたということがまず、ミンダルペンイユニオンの大きな功績だと実感した。インタビューの中で、共同住宅を利用した若者の「倒れても大丈夫、転んでも大丈夫、床にマットレスが1枚敷かれたような気がする。」という声からもわかるように、当事者である若者自身も「この状況は普通ではなく、変えることができる、救われることができる」ということに気付き、その気付きが友達や人のつながりを通して広がっていくことで、どんどんと社会は変わっていくのだと感じた。

また、ミンダルペンイユニオンの取り組みは住宅問題の解決だけに留まらず、ミーティングを開いたりワークショップを行ったり、という人同士の関わりを通して若者自身の無力感をなくし、より元気に生きていく為の取り組みも行なっている点が素敵だと思った。

ミンダルペンイユニオンの最終的な目標は「団体がなくなること」であると聞き、私自身もYECの活動をする中でメンバーと「YECがなくなればいいね」と話していたことがあり、とても共感した。

網谷照世(静岡県立大学2年)

青年ユニオン



日時：2019年9月4日（水） 13時頃～
場所：ソウル特別市麻浦区白凡24 4階青年ユニオン

先方：キム・ヨンミンさん（事務所長）

当方：通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：02-735-0262

メール：yunion1030@gmail.com

HP：<http://youthunion.kr/xe/>

Facebook：@y.union1030

<https://www.facebook.com/y.union1030>

概要：青年ユニオンは2010年3月に設立された満15歳～39歳までの誰でもが加入できる労働組合である。2000人ほどの会員がいる。労働組合として若者の労働問題に注目しており、主に労働相談・就職相談を行っている。若者たちが直接自分の力で問題解決の当事者となることを目的としている。

施設概要：ミンダルペンイと共同の事務所となっている。

設立の背景：2010年当時、失業者の増加、若者の住居問題などの大きな社会問題が起きていた。しかし解決する手段がなく、そのような若者たちの悩みは時間が解決できると思っていた。しかしそれは一時的な問題ではなく社会的な役割として、政策・認識を変える必要があると気付いたことがきっかけで、この団体が設立された。

活動：主に若者たちが仕事をするうえでかわること、労働全体の問題を扱っている。例えば、青年の失業・雇用問題、新入社員の人権問題、バイト・ニートに関することに対して問題意識を持っている。

この施設に相談に来る若者のタイプは2種類ある。社会問題を変えていこうという積極的な意思を持つ若者と、自分自身の問題を解決したいという思いからここにやって来て、雰囲気が入りに活動に参加する若者である。労働相談に来る若者は後者が多い。まず電話での相談を受け付けている。相談の中には解決策がなかったり、不透明になったりしてしまうケースもあるが、青年ユニオンでは若者の話をよく聞き、共感するという基本的なことを大切にしている。

また、青年ユニオンは最低賃金を決める最低賃金委員会というものにも参加している。青年たちのことを代弁できる存在として認められたことで参加できるようになり、今年で5年目となる。韓国の二大労組として民主労組、韓国労組というものがあり、どちらも約100万人の会員がいる。青年ユニオンの会員は約2000人だが、それぞれ代表を1人ずつ出して話し合っている。

質問 (Q&A) :

Q.ここで扱っているバイトやニートなどの問題の原因は何か？

A.労働権に関する認識が低いのが原因の一つだと思う。労働というのは「お金をもらう対価として働く」という交換条件にある。しかし中には、労働者の人格まで買おうとする認識の人もいる。また、序列や秩序による上からの命令に従わなければいけないという垂直的な文化の構造がある。このような認識は元々韓国の文化の中に内在していた。また、低所得や低成長のような経済的な背景も原因にあげられる。IMFの影響から多くの人が失業し、安定した雇用が難しくなった。こうして人々は、正規雇用者となるために競争を勝ち抜かなければいけないという状況になった。そして競争に負ければ、仕事を転々としなくてはならないような不安定な社会環境になってしまった。このような2つのことが主な原因にあげられる。

Q.どんな相談が多いのか？

A.賃金未払い、最低賃金より金額が少ない、不当解雇されその時の支援はないのか、という相談が多い。また、最近は契約形態の相談も増加している。それとは個人（フリー）と会社員のどちらが労働契約を結ぶ上で有利なのか、という相談などである。

Q.ソウル市の外で不当に賃金が払われることが多いとのことだが、ソウル市以外の若者たちからの相談が多いのか？

A.地方で活動をしている若者はいるが田舎の方は規模が小さく、問題提起することが難しいため、そんなに多くない。会員の60~70%はソウル市(首都圏)に集まっている。

Q.どのくらいの最低賃金が妥当か？

A.多くの人が1万ウォンを指示するが、社会状況を見た時、現実的ではないと思う。

Q.韓国にも日本の労働基準監督署のようなものがあるか？

A.韓国には勤労監督官というものがある。仕事内容は、事件解決、事前に会社に労働法を守りなさいという勧告などである。しかし、仕事が多く公務員として専門性が必要なため、人員不足が問題となっている。

感想・所感

私は青年ユニオンでお話を聞いて、人々の労働に関する認識を変える必要があると感じた。聞いた中で労働権というものを人格まで買ってしまふという認識をしてしまうことや、労働という義務を果たしてないと最低賃金をもらう権利がないというようなことは、日本と少し共通していると感じた。このような認識を変えると同時に労働権の保障と、人々が安心して働ける雇用を増やすことが大切だと思った。また、韓国も日本と同じように地方では最低賃金が守られてないという状況があることを知った。首都圏に多くの施設が集まっているから、地方で問題が起き

ていても問題提起が難しくなって保守的になってしまっているからなのかと疑問に思った。地方の方が劣悪な状況なのにもかかわらず、そこまで手が届かないのは嫌だと思い、解決するにはどうしたらいいのだろうと考えるきっかけとなった。

そして、この施設で大切にしている「話をよく聞き、共感する」ということを私もこれからの活動で大切にしたいと思った。具体的な解決策なども重要だと思うが、相手にとっては「しっかり話を聞いてくれて理解し、共感してくれる」ということが一番安心できると思う。だから普段の生活でもYECの活動でも、このことを大切にしておしていきたい。

松本成海（静岡県立大学1年）

青年ハブ



日時：2019年9月4日（水） 13時頃～
場所：ソウル特別市恩平区統一路 684 22棟

先方：アン・ヨンジョンさん

当方：通訳；金美珍さん（韓国の非正規労働の研究者）

大谷好恵（SSS、2年）

松本成海（YEC、1年）

森友理子（YEC、2年）

八木健斗（YEC、1年）

油谷彩夏（YEC、1年）

電話：82-2-6268-6916

メール：contact@youthhub.kr

HP:<https://youthhub.kr>

Facebookhttps://m.facebook.com/youthhubpage/?locale2=ko_KR

概要：若者が活動する場が必要という思い、活動しながら経験やノウハウを身につけてほしいという思いから、青年ハブは2013年4月に設立された。

施設概要：青年ハブは革新パークの中に併設している施設である。2013年4月に設立された。ソウル市の行政の資金で建てられた。青年政策ネットワークと同じスペースを共有している。市が建てた施設のうち唯一、若者の自立のためにお金を稼ぐことが出来る。

設立の背景：当時「公務員になること≡幸せ」の考え方が一般化されていたため、多くの青年が公務員を目指して勉強をしていた。しかしながら、その97%が試験に落ちてしまっていた。そんな中、公務員を目指していた35歳の女性がストレスから母親とともに焼身自殺をした。原因は、自らが抱えるストレスを発散する場所やコミュニティが少なかったことにある。母親の皿洗いの音にさえも怒りを感じてしまうほど追い詰められている状況だった。

この悲惨な事件を受けて「公務員にならなくても幸せな人生が送れるのではないか」と考えた。そこで「失敗できるチャンスと時間」を設けるコミュニティの場として2013年4月に青年ハブが設立された。

活動①:チャム

話し合いながら食事をすることでコミュニティを支援する。3人以上からでき、1年に10回以上食事会をしなくてはならない。この食事会は孤立しがちな青年のコミュニティをつくることを目的としている支援である。年間100万ウォンの支援が得られる。

活動②:活

社会的な活動であり個人的な活動ではない。現在は女性商品を販売している。

活動③:業

好きなことや専念したいことを仕事にしたい人への支援をしている。10万ウォンの支援が得られる。

質問（Q&A）：

Q.設立当初の活動はどんなものだったのか？

A.設立当初は「ソウル市青年仕事ハブ」という名前だった。そのため最初は、バイトなど仕事に関するものが主な活動だった。時代の変化に合わせて今は大きく変わっている。

Q.青年ハブ側の方から研究テーマを決めるときに何か意識していることはあるか？基準などはあるか？

A.比較研究に関する質問。そのときに、どういう時期でどういう内容なのか、毎年青年政策がどういう方向で向かっていくのか、どれが公式なのかを長期的観点と短期的観点から計画を立てる必要がある。直接的な質問に関しては現場の人数を把握しているということが必要だ。そのときの変化は、何が必要なのか何を意味しているのか正確に把握して、変化の流れに合わせていくことが基本的なことだ。

変化の流れは主に2つある。1つは上から政策を問われていくことだ。もう1つの重要な変化の流れは、当事者が活動していく中での変化、つまりは社会が変化するパターンが現場の中で変わっていくことだ。青年ハブは後者の当事者の変化を積極的に把握して、ここでどのような積極的活動を支援して手伝っていくことができるのか、そのための構図、社会の認識を変えていくことが重要ではないか、ということを経験として考えている。例としては、2013年設立されたときにはまず、当時のソウル市にいる若者にとって必要なものは何だろうかと考えた。その結果、若者の住居と雇用の安定をさせることがニーズだった。積極的に支援活動を進めていく中で、もう少し広い意味で青年の考え方や、人生の目線を変えて、解釈の意味を広げていく必要がある。今は都市だけではなく地方に住む場合、若者にとって何が必要なのか、そのときどう行政として活動すればいいのか、というように大きくテーマが変わったりした。青年ハブの活動の方向性が大きく変わった例として実証できる。

Q.2013年に青年ハブが設立されたときの青年たちの活動内容はどのようなものか？

A.2013年の青年ハブの正式な名前は「ソウル市青年仕事ハブ」だった。仕事支援が主で、仕事に関する団体が中心であった。初期は平和運動をやっている団体や社会革新の活動をしている団体、デジタルの情報を共有する団体など、当事者たちが新しい仕事に関する活動をしながらそのような団体を運営していた。その後大きく変わった。ミンダルペンイや青年ユニオンは当事者として重要なキーパートナーとして理解していただけたと思う。

最近の変化としては、ソウル市の行政に関わっていく活動ができたことがある。ソウル市と民間の青年のグループが互いに青年に関する政策を共同で生産していくという通路を加工して、市に自分達の政策を求めていくような活動を5年間続けた。そして昨年ではソウル市から50億円ほどの予算を受け、若者自身がこのお金をどう使うのかを決定するために、若者が市の行政に参加してい

る。今年からはソウル市に青年課が新設され、それはソウル市の職員、民間人、青年で構成される。

Qネットワークはどのようにしてつくるのか？

A.韓国は農業社会だったため、共同体の基盤がある。しかし高度経済成長期と能力主義で個人主義によって共同体が崩壊してきた。今は断絶されてきたが、親世代は共同体の生活をしてきたため、そのような共同体を重視する傾向を持っている。また、これまでは経済成長とともに社会も豊かになったが、現在は青年たちが以前より豊かな生活ができているとはいえない。未来がない社会構造になっていることに問題意識が強くなってきた。それが現在の若者の不安の根源になってきている。これを改善するために感覚的にどうすればいいか、そしてどのような共同体を作るべきか考えてきた。

一つ重要なのは、社会運動を考えてきた世代「86世代」はみんな協力して盛んに政治的活動してきた。今の若者はその世代と違って、基本的に個人主義、能力主義の環境で育てられたため、他者と協力できるのか、という点において問題がある。しかし民主主義は変化してきている。個人個人で考えていることは違ったとしても、一緒に解決することができるのだ。政治に関しても青年が直接政治、自治に関わることが大切だ。誰かと一緒に政治に参加することで協力が生まれる。また、全世界の若者がどのように社会に関わるのか、協力していくのかしっかり考えることが大事である。今までは、集まってデモを起こす連帯の形をとっていたが、今は色んなところから情報を得て、活動していく形をとっている。

感想・所感

私が青年ハブについてのお話を聞いた時にまず、市や国が若者問題に対して支援を積極的に行なっているということに驚いた。日本では、青年ハブのような若者の居場所となるような施設が少なく、そしてこのような支援に対して消極的である。だが、日本でもきっかけさえあればこのような施設を築くことが可能ではないだろうかと思った。

青年ハブでは、若者が自分の研究したいことを自由に研究することができ、安全な場所を提供することで失敗を恐れずに挑戦できる。私は、そうすることで色々なことに挑戦する意欲や多くの経験を蓄積することができ、将来にも役に立つと思った。

青年ハブの活動は、若者がやりたいことをできるように支援するという「もう一つの放課後探しプロジェクト」（YECが行っている活動の一つ）と同じような要素を持っていて、YECの活動は世界共通であるということを知ることができ、少しでもYECの活動が韓国のように広まるよう努力していきたいと思った。

八木健斗（静岡県立大学1年）

無重力地帯ヤンチョン



日時：2019年9月4日（水） 15時頃～

場所：ソウル特別市陽川区木洞404-1

先方：チョン・チョワンさん、その他ヤンチョンを運営する大学生4名

当方：通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大林采奈（YEC、2年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

森俊輔 (YEC、1年)
保岡治樹 (YEC、1年)

電話 : 010-2790-6107
メール : youthzone3@youthzone3.kr
HP : <http://youthzone.kr/>
Facebook : <http://www.facebook.com/youthzone3>

概要 : 無重力地帯ヤンチョンはソウル市に作られた7つの青年施設「無重力空間」の1つであり、若者達がお金をかけずに集まり活動するために作られた施設である。「無重力地帯」とは、ソウル市青年基本条例第19条に基づき、若者たちの活動を保障するため設立した、若者のための空間である。若者を引き寄せる社会の重力から脱し、自由に活動できるようサポートするという意味を込めて無重力という名前が付けられた。

施設概要 : 無料のキッチンスペースや休憩スペースの他に、ラジオステーションがあり若者が広報をする際に利用することができる。

設立の背景 : 若者が何か活動をする際に、お金の負担がないように無料のスペースをつくろうという思いから設立された。

活動① : 力量強化プログラム

講演会や相談会を通して若者の抱えている問題を解決することで自分の力を高める。

実例 : 私に色をつけるプログラム

→美術心理治療プログラムで、就職難で失業状態に陥った若者が気軽に相談を受けられるプログラム。

活動② : 活力増進プログラム

いろんな人が集まって、映画祭やフリーマーケットなど自分のやりたいことを開催することで活力向上を目指すプログラム。

実例 : コミュニティ支援事業

→3人以上の若者が集まってやりたいことを企画し、その支援金として100万ウォンを支援する。

質問 (Q&A) :

Q.どのくらいの年齢層が多く利用しているか?

A.19~39歳を対象にしているが、30代後半の人は少なく20代の方が政策に多く利用している。映画祭のような大衆的なイベントには30代も多い。40代も利用できるがスペースの利用は若者優先。

Q.引きこもりの支援はやっているのか?

A.引きこもりの支援の前に引きこもりでない人に対する支援で手一杯である。韓国の引きこもりは日本と少し印象が異なるかもしれない。

感想・所感

ここで働いている同年代の方々とディスカッションを行って、私は2つ印象に残ったことがある。1つ目は韓国の若者の政治意識の高さである。政治意識が高いため選挙の投票率も高く、選挙に行かないことを恥ずかしいことと言っていた。

2つ目は自ら行動に移す姿勢である。今回ディスカッションさせていただいた韓国の若者全員がデモなどへの参加経験があった。政治に対して疑問や不満があった時は、自分の想いを留めず社会に発信しているのだと思い感銘を受けた。

日本の若者は政治に対して興味をあまり示していないような印象を、若者の選挙の投票率の低さからも感じられる。しかし韓国では朴槿恵大統領の事件以来、若者に政治への関心が芽生えたように日本人もきっかけがあれば変われると思った。まずは、自分が行動することが物事を変えることに繋がるという考えを持つことが大切だと思った。

大林采奈（静岡県立大学2年）

5.18民主化運動記録館





日時：2019年9月5日（木） 10時頃～

場所：光州広域市東区錦南路221

先方：キム・ドンギョさん(現地の大学生で施設を案内して下さったボランティアの方)

当方：通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：+82-62-613-8204

ファックス：+82 - 62 - 613 - 8299

HP：www.518archives.go.kr/eng/

概要：光州事件（5・18民主化運動ともいわれる）について学ぶことができる記念館で、2015年5月13日にオープンした。

施設概要：館内は1階から3階にかけてある三つの常設展示室を中心に構成されており、光州事件に関する記録や資料、写真などが数多く展示されている。また、世界各国で起きた民主化運動にまつわる事件（例：台湾の2・28事件）についても、少しではあるが紹介されている。

設立の背景：1980年に起こった5.18民主化運動を1つの時代の歴史的な挫折としてその苦痛を心に刻むのではなく、新しい出発点として位置づけるためである。また、5.18民主化運動が韓国の民族史に何を残し、子孫にどのような歴史意識を伝えるべきかを明確に示すためでもある。

活動①：光州事件当時の状況と真実を韓国全土に広め、その精神を受け継ぐ努力をする

活動②：『5.18民主化運動』の発刊

質問 (Q&A) :

Q. 韓国の学生(小中高大)は歴史の授業でどのように光州事件を学ぶか？
ただの歴史として覚えるのではなく、時間を使って丁寧にどうしてこのような事件が起きたのかなど深く考える勉強はされているのか？

A. 正確な情報が教科書に載っていて、正確な教育がされているが、教科書には1ページほどしか取り上げられていない。資料館で説明したような詳しい説明は載っておらず、このような事実があったとだけ書かれている。光州事件の授業をする時に詳しく説明してくれる先生もいるが、してくれない先生もいる。前は近現代史という科目があってその科目では資料館で説明された内容が全て教科書に載っており、詳しい説明を受けた。今は近現代史という科目がなくなって、歴史というとても大きなくくりにされて教育がなされている。

Q. 光州事件に対する侮辱にはどのようなものがあるのか？

A. 犠牲者たちが銃に撃たれて倒れている姿を「日光浴を楽しんでいる光州の市民たち」と言う侮辱がある。

感想・所感

今まで世界史の勉強の中で光州事件という事件があったことは知っていたが、事件の詳細までは知らなかったので今回の光州事件5.18記念館への訪問を通じて光州事件について学びを深めることが出来た。光州事件は私が思っていたよりもずっと悲惨なもので、とても胸が痛くなる思いだった。

この施設でお話をしてくださったキム・ドンギョさんは光州事件の被害者ではないが、この痛ましい光州事件の真実を語り継ぐという大事な役割を担っている。このような事件は時間が経つと共に人々の記憶から薄れていってしまうことが多いと思う。しかし、キム・ドンギョさんのような方が今の若い世代の人々に語り継ぎ、またその若者が語り継いでいき、年月が経っても人々の記憶の中からはなくなることがなく、ただ過ぎ去ってしまったこととして捉えるだけにならないようにしていくことが大事であり、私たち若者がそのような意識を持つことが大事なのだと思った。

関文菜 (静岡県立大学 1年)

民主の家



日時：9月5日（木） 14時頃～

場所：5W2G+F5 クァンジュ広域市, 韓国 光州広域市

先方： ウォン・グンソクさん、チョン・ヨンホさん（人権保護官）

当方： 通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：675-3555

施設概要：人権保護の拠点として2009年に設立。

設立の背景：1960～1970年にかけて軍人の独裁政治が続いた。それまでは民主化運動が抑圧されていたが、朴正熙が暗殺後、各地で民主化運動が活発化した。そのなかでも「光州民主化運動」は大規模な運動で、軍によって多数の市民が殺害される事態となった。その歴史を経て、韓国では10年ほど前から社会全体で人権を守ろうという動きが活発になった。例としては、me too運動がある。この運動はもともと男女差別をなくそうというものだが、最近では上司と部下の間のパワハラをなくす取り組みにもつながっている。光州市は「人権都市」として提唱を始めた韓

国で最初の都市である。現在はソウル市も含め30~40都市が人権都市として人権の政策を取り入れている。

内容：光州市にある民主の家で朝鮮大学日本語学科の学生と2時間程度自由に意見交換した。特にテーマなどは設けず、各自で話したい内容についてを自由に話し合った。形式は1グループ6人程度の計3グループで行った。

感想・所感

韓国の学生がとても温かく迎えてくれたことがうれしかった。また話してみると、国が違っても考え方や感じることは似ていて、親近感がわいた。一方で、政治についての話をしたときに政治に対する韓国と日本の学生の意識の違いを感じた。韓国の学生はデモ参加経験があったり、投票は行かないと恥ずかしいという風潮があったりして、政治に関心が高いと感じた。また韓国では、ファクトチェック（報道が本当に正しいか調べること）が流行っていて、情報を鵜呑みにせず、批判的に見る力がついていると感じた。

韓国の受験について聞いたところ、驚く答えが沢山返ってきた。私が話した学生は高校3年生になると土曜日でも学校があり、夏休みも3日しかなかったそうだ。また学校は朝の午前7時から午後10時までであり、放課後も塾に行き勉強していたという話を聞いて、韓国の受験は相当過酷なものだと感じた。韓国では部活も盛んでなく、中高生の余暇はあまりとれていないのではないかと思った。将来のためになにかを努力することは素晴らしいことだけれど「いい大学に入らないと安定した職につけない」という漠然とした不安から学校の勉強ばかりでやりたいことができない、またはやりたいことが見つけられない状況であるならそれは問題だと思った。

韓国と日本は地理的にも文化的にも近い国同士なので、お互いのいいところを学びあって助け合っていければいいなと思った。韓国の学生とお話しできたことで、自分たちに今まで当たり前だと思っていたことが当たり前でないと気づかされた。これにはやはり、国や育ってきた社会の違いが関係すると思った。違う背景をもった方と話すことで、自分たちを客観的にみることができ、新たな発見をえられた。今後も交流を続けていきたい。

西尾圭織(静岡県立大学1年)

小グループでのディスカッションでは政治や経済、国際情勢などから身近な悩み、学生ならではの話題など幅広く話すことができた。韓国の青年たちと会話の中で私が強く感じたのは、私たちと彼らがとても似ているということだ。言葉や文化が違うだけで生活や考え方などには共通点が沢山あった。日韓関係が悪化している中で、両政府が互いに歩み寄ることが大切だと思った。そのためにこれからも積極的な民間交流を続けることが大切だと思う。

保岡治樹（静岡県立大学1年）

光州青年センターthe森



日時：2019年9月5日（木） 16時頃～

場所：光州広域市東区西石路56"錦南地下街

先方：キム・ヒョンヒさん(光州青年センターthe森 センター長)

当方：通訳；大草稔さん(日本語・韓国語講師、K2コリア、韓日翻訳・通訳、POCHI製作者)

網谷照世（YEC、2年）

大谷好恵（SSS、2年）

大林采奈（YEC、2年）

森友理子（YEC、2年）

油谷彩夏（YEC、1年）

関文菜（YEC、1年）

西尾圭織（YEC、1年）

松本成海（YEC、1年）

森俊輔（YEC、1年）

八木健斗（YEC、1年）

保岡治樹（YEC、1年）

電話：062-232-1939

FAX：062-232-1938

メール：gjtheforest@naver.com

HP：http://www.gjtheforest.kr/

Facebook<https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&url=https://m.facebook.com/gjtheforest/&ved=2ahUKEwiwo9C08cDIAhWLxYsBHQD0Bb4QjgwAHoECAUQAg&usg=AOvVaw2IPCMfn6fmCGKeRkpd5ie->

開館時間：月～金10：00～21：00

土10：00～19：00（日、祝日休館）

設立の背景：光州市の委託を受けて、2015年6月に設立。

施設概要：施設は地下鉄の駅構内に存在する。光州青年センターは光州広域市と（社会法人）光州路とともに運営している。

概要：光州青年センターでは、青年に公正な出発のための時間と機会、多様な経験を支援している。ビジョンを「持続可能な未来、青年を支える社会！」とし、ミッションに「青年に時間、空間、機会保障」を掲

げ、具体的には「5つの軸」に基づいて活動を行っている。

5つの軸

- ①プラットフォームの運営及び活性化
- ②社会進入及び安定支援
- ③青年活動の活性化
- ④政策研究及び交流
- ⑤青年一経験及び機会の保障

活動①：プラットフォームの運営及び活性化

光州青年センターは、プラットフォームを提供しており、それにはオンラインとオフラインがある。オフラインのプラットフォームでは、若者に8つのリアルスペースを無料で提供している。オンラインでは、青年情報プラットフォーム「ドッキング」というページから、利用者に向けて仕事に関することなどの情報を発信している。現状、韓国政府が推進する情報提供は、それぞれの部署が、それぞれで若者政策に関する情報を発信しているため、若者は情報が得ることが難しい。そのため「ドッキング」ではバラバラな情報を一つに集めて、決められた曜日に安定的に情報を更新し、カードニュースなどの方法で若者にわかりやすいように情報を提供する努力をしている。「ドッキング」の月利用者数は2~5万人で徐々に増えている。

活動②：社会進入及び安定支援

◆若者たちの心理相談所「とだとだ」

「とだとだ」とは日本語で「とんとん」と肩をたたくニュアンスの言葉である。「とだとだ」とは広州青年センターが運営する、若者が無料でカウンセリングを受けられる相談所のことである。韓国社会は競争が大変熾烈であり、若者は入試、就活を通じてかなりの精神的ストレスを抱えている。しかし、彼らが心理相談を受けることが難しい理由が大きく二つある。

一つは心理相談を受けることに対して、韓国ではネガティブな感情を持つ人が多いことだ。具体的には青年世代に対して、それより上の世代の人たちが、時代の変化に合わせた適切な言葉がけができていないことが挙げられる。「どうして就職しないのか」「どうしてもっと我慢できないのか」など、上の世代の人たちの見方が変化しない現状があり、若者はそうしたストレスにも板挟みにされている。

二つ目は費用の問題だ。通常だと1時間の診療で最低5万ウォン、さらに診療では最低7回程度通う必要があるため、多額の費用がかかってしまう。そのためお金に余裕がない若者はカウンセリングへ行くことをためらう。だからこそ、光州青年センターthe森では無料で心理相談を受けられるようにしている。カウンセリングはオンラインとオフラインに分かれている。オフラインに関し

では、テンプルステイ形式の相談が増えている。その主な理由は、韓国人の中でストレス発散のためにお寺に行くことが流行っているからだ。またこの心理相談は一對一の形式だけでなく、みんなで話し合いながら相談する形式のものやコンサート形式の相談会もある。「とだとだ」は光州青年センターで最も人気の活動である。

◆ニートの発掘、支援

センターではニートを探し出す活動し、彼らにあった支援を提供している。近年、韓国の若者政策の中で「ニート」という言葉が目立ってきた。韓国社会で「ニート」といわれる表現は三つある。それは「仕事をしていない」、「訓練を受けていない」、「教育を受けていない」である。そして彼らを探すことはとても難しい。なぜなら彼らはコミュニティを持っていないことが多いからである。そのため、韓国には推定200万人を超えるニートが存在するといわれている。多くのニートは何十回も履歴書を出しては落ち続け、そのことから就職したいという意欲が低下した状態であることが多い。そこでセンターでは、ニート状態の人たちと彼らの人生の報告書を書く作業から始める。自分がどんな仕事をしたいのかについて少しずつアプローチしていく。これに関連して「三男一女」という言葉があり、その意味は就職面接の際に「三男一女の一人として生まれた」と答えるということだ。要するに、みんな同じようなことを書いてしまうという皮肉を表現している。

活動③ 青年活動の活性活動

◆若者のコミュニティ活性化事業

イルタンモヒム・・・「とりあえず集まって力を得よう」というのが目的。コミュニティ活動をしたいが自分から行動することが難しい若者に月二度、自治会に参加してもらっている。この会ではすでに存在するコミュニティに参加でき、新しいコミュニティを作ることも可能。この集まりに必要なコーヒー代などを支援する。

青年モヒム・・・コミュニティを作った若者のために4か月で60万ウォンの支援をしている。さまざまなコミュニティがあり、去年は45のコミュニティができた。先方が興味を持っていたのは「ホンサム（高麗人参の会）」という献血を70回以上経験したことがある人たちが集まったコミュニティだ。また「円盤投げ」といって、frisbeeやブーメランなどを行うスポーツ同好会のようなコミュニティもある。ほかにもボードゲーム、ピアノ、グルメ同好会、旅行などがある。

チャクタンモヒム・・・具体的にプロジェクトをやろうという人たちへ200万ウォンの支援を行う。ただ集まるだけでなく具体的なプロジェクトを行うことができる。青年モヒムとの違いは成果を残すかどうかであり、これはコミュニティ活性化のプログラム事業である。

活動④ 政策研究及び交流

◆青年の海外政策プログラム

「〇〇で〇〇を勉強したい!」という若者を募集し、審査と面接を行って1年に15人ほどの若者を、政策研修を目的として外国に派遣している。日韓の若者交流は非常に活発である。

◆青年政策実験室

青年問題に関係した社会問題解決のための「小さな実験」という名の事業である。例えば、韓国社会ではデリバリー労働（出前などの意味）に関わる労働者がとても多く、特に青年が携わることが多い。しかし、この仕事は労働法で保護されにくい現状がある。そのために、デリバリー労働をする青年を研究する取り組みが行われている。また、いい研究は政策として取り上げられることもあり、その場合、韓国政府から500万ウォンの支援が得られる。この一例として、大学生たちの負債を予防するために考案された「ドリーム銀行」が実際に実現したという成果もある。

今年の研究で先方が興味を持っていたものは、結婚式に関する研究である。韓国社会では結婚式の準備費用が高額なことから、韓国の若者は結婚に消極的である。そんな現状を解決するために「小さな結婚式」を政策として提案する。この政策とは公共機関、自宅や自宅の庭などで結婚式を執り行うことで挙式の費用を抑えるというものだ。韓国の有名人が小さな結婚式を行う例もある。

活動⑤ 青年一経験及び機会の保障

◆光州青年経験ドリーム事業

「ドリーム」には、差し上げる（韓国語）夢（英語）の2つの意味が込められている。この事業は、6つの領域（公共、企業型、社会福祉、社会的経済【協同組合、町企業】、若者たちが起業したもの、青年社会的企業【若者たちが起業したもの】、公益事業型【NPO NGO】）の350の企業の中から一つを選択し、5か月の期間で、1日5時間の労働機会を若者にプレゼントするというものだ。時給は最低賃金よりも20%高い「生活賃金」が適応される。国家によって定められる「最低賃金」はあまりにも低いため、そのことを考慮して地方自治体が定める「生活賃金」が基準となっている。半年ごとに500人、1年で1000人の若者が350のうちの1つの事業所を選択して半年間働いている。この事業が始まって3年が経過した現在では、政府から活動が評価され、国費を充ててもらえるようになった。

しかし一方で、残念ながらこの事業は若者の即時採用にはつながっていない。なぜなら、非正規職にかかわる法律が大きく関わっているからだ。企業は人件費を削減しようとする傾向が強く、2年以上人を雇うのをやめようという動きがある。そのため、労働者は2年目以降、非正規雇用となってしまうケースが多発している。もともと「光州青年経験ドリーム事業」は非正規職の保護のための政策だったが、現状では非正規雇用を生み出すものになってしまっている。正規雇用と非正規雇用の最大の違いは、雇用期間に制限があるかどうか

である。そのため一見、差別がないようだが、実際には非正規雇用者には退職金がなく雇用の安定性がないなど、さまざまな面において差別が存在する。正規労働者と同じ仕事をしているのに、どんなに稼いでも税金を払ったら88万ウォンしか残らない、いわゆる「88万ウォン世代」とはこの事実に由来する。韓国の青年問題の核心は、非正規職との関連が高い。2年ごとに新規契約をしなくてはならないという不安から、若者は未来を描くことができない。そんな状況の中で彼らを象徴する「3放世代」（恋愛、結婚、出産を手放す）という言葉が登場した。この「3放世代」は日本の「悟り世代」とは明らかに違う。「悟り世代」は積極的に手放すことを意味するが、「3放世代」は手放すしかない、諦めるしかないような、より苦しい現状を意味する。

◆青年財団

青年のための政策で、オーダーメイドの支援を行うために生まれた。一種の付き添い型支援事業である。例えば、背広がほしい人には背広を与えたり、健康な状態を求める人には、健康のための支援をおこなったりと、人によって求めるものが違うことから、一人一人の身の丈に合った支援を行っている。年に30人ほどを対象としていて、最近始まったばかりだ。

質問 (Q&A) :

Q.光州の若者の事情とほかの都市の事情で違うところはどこか？

A.失業率が高いことは、韓国全体における普遍的な現象である。首都圏（ソウル特別市とその周辺）と比較すると、光州市は産業が少ないため雇用が少なく自営業が多い。賃金の水準も低く、文化活動などの経験ができる機会も少ない。また光州に限った話ではないが、仮に負債が生まれてしまうと、安定的な仕事につけていないために返済に必要なお金を稼ぐことができず、負債が堂々巡りしてしまうという状況が生まれている。また光州市の人々は特に、子供たちをソウルに送らなくてはいけない、と考える傾向が強くある。その背景には、全国的にも多くの光州出身の政治家が政界で活躍していることがあり、光州出身の若者が出世することを望む地域性がある。一方で、光州の人々は地方に残る若者たちを大事にできていない。光州市民は光州に残る若者に対して「何か足りなくて田舎に残っている」という印象をもつ。そのうえ、韓国の教育の序列化がすすみ、偏差値の高い大学がソウルに集中していることから、この傾向は今もなお強く存在する。

Q.光州青年ドリーム事業において、若者の生活はどのように保証されているのか？

A.今の水準だと1時間に10000ウォン、四大保険（年金保険、健康保険、産材保険、雇用保険）にも加入でき、必ず事業者は提供しなくてはいけない。若者たちが保険に加入することで失業率が低下する。しかし失業率が低下することから、見た目では成果がでていっているように見えても、それは6ヵ月限定の数字である。そのため現在、若者の失業率は10%だが、実際は20%越えていると予想される。四大保険のなかでも雇用保険が最も重要で、雇用保険に加入した状態で6ヵ月以上働いていれば、失業しても月給の80%を6ヵ月間もらうことができる。（日本の場合は3ヵ月）しかし、6ヵ月間は就職活動をしているという証明

が必要である。

Q. コミュニティができればお金がもらえるのか？一人だともらえないのか？

A. 最低三人がモヒムには必要。2人だと2人の関係が崩れた時にコミュニティがなくなってしまう可能性があるから。

Q. 一人一人に200万ウォン支払ったら、多額のお金がかかるのではないか？

A. イルタンモヒムは集まるためのコーヒー代程度を提供するもので、200万ウォンの支援には審査が入る。青年モヒムは今回40チームあり、チャクタンモヒムは5チームほどだ。

Q. 団体通しての運営資金はどこから出るのか？

A. 100%光州の税金で運営されている。光州青年センターの職員は公務員の組織とは違って、もともとは公務員がやるべき仕事を民間が委託されて行っている。そのため、公務員と同じ水準の給料を受け取っている。

Q. 「コミュニティ事業」とはどのようなものか？

A. 個人的見解では、「コミュニティ事業」はもともと共同体のための事業であり、コミュニティを作るための事業である。昔は町内会や学校など自然な共同体が解決していた。しかし、今はそういった共同体、人間同士のつながりがほとんどなくなってしまい、資本主義、個人主義が進んでいる。だからこそ共同体を作って、人間同士のつながりを作る「コミュニティ事業」はとても重要である。

Q. (光州青年センターthe森からお土産の品としていただいた) ボトルには、「数字を越えて、青年の生き方を語る」と書いてあるが、どんな思いを込めてつけたのか？

A. 韓国では若者を巡って数字が出てくる。失業者数など私たちのセンターにも数字が求められ、いつも数字が付きまとう。しかし、数字で語るができない青年たちのストーリーがあるはずだ。だから私たちは数字を越えないといけない。なぜなら、私たちは数字ではないからだ。

韓国には形は違うかもしれないが、若者のジョブセンターもある。日本を真似したところも多い。しかし、ジョブセンターが増えるほどに失業率が上がるという矛盾がおこり、雇用中心の政策は失敗であることが明らかになった。そのため、若者の生活に対する点検が必要である、という見方に社会がシフトした。これまで青年の自殺や困難な家庭状態など、若者の残酷な問題が放映されてきた。これに対して、ソウル市の市長が若者たちの悩みを解決に導くため青年手当を約束した。このように青年の問題が明らかになって、意思のある政治家が表れて若者たちの政策をはじめた。

Q. 光州の若者の幸福度が高いのはなぜか？

A. 私自身(先方)は今よりも幸せになれると思い、現在からのよりよい変化を夢見る。しかし、今の状態がいいという若者は二つのタイプに分かれる。本当に満ち足りている人か、これ以上幸せになることが不可能と考える人かである。光州の若者のほうがソウルよりもポジティブな回答が得られたが、実際は光州のほうが恵まれた環境とは言えない。現状の方がまだましだと考える若者

が多いのではないかと考察する。

感想・所感

私が印象を受けたのは、光州青年センターの若者に対するアプローチの幅広さと、それぞれの活動に対する確固たる根拠である。

センターが若者への幅広いアプローチをすることによって、光州の若者をあらゆる面からサポートしようとしているからこそ、彼らはセンターに対して安心感と信頼感を抱けるのだろうと思った。そして5つのアプローチからなる様々な活動は、現代の若者の現実的な悩み、状況をしっかりと分析し、若者のニーズに忠実な印象だった。一つ一つの活動の背景がはっきりと見えていることから、一つ一つの活動に強い思いを感じた。

センター長の話で残っているのは、彼女がしきりに「コミュニティづくり」の重要性を訴えていたことだ。それまでの私は、若者政策におけるコミュニティづくりの意図について漠然としか考えていなかった。しかし、彼女の話から、これから先の社会の中で誰一人取り残さないために、「すべての若者」が輝くためにこそ、コミュニティによって個人をつなげ、みんなで助け合っていくシステムが必要なのだと学ぶことができた。

センターの活動の一部はYECにもかなり通じるものがあり、たくさんの刺激とYECの活動をよりよくするための材料をもらうことができた。また「ユースワーク」という概念によって国をまたいで団体がつながっていることも、とても面白いと感じた。

森俊輔（静岡県立大学1年）

視察メンバーの感想・気づき

網谷照世

色々な方のお話を聞き、日本もこうだったらいいのに！と羨ましく思うところと、私たちももっとこうしなきゃ！と見習いたいと思うところがたくさんありました。

革新パークを初めとする今回視察した多くの場所や団体は、市が運営していたり、市から助成を受けていたりしており、行政機関が若者を取り巻く問題を理解し、解決することに積極的な姿勢だったことが羨ましかったです。しかし、日本で若者に対しての政策がもっと生まれ、割かれる予算が大きくなるためには、私たち若者が当事者意識を持って行動し、もっとアピールしなければいけないということも視察を通して感じました。

今回の視察では、普通に大学に通い、普通に生活をしている韓国の同世代の方々とお話できる機会をたくさんいただきました。その中にはデモに参加したことがある人もない人もそれぞれいたし、政治に対する考え方も様々で、本当に興味深かったです。しかし、彼らから一貫して感

じられたのは、自分が意見を表明したり、行動したりすることで社会が変えられる、社会に対する一人一人の力の大きさを知っている、ということです。それを知っているからこそ、政治が自分に関係ないと思う事はないし、きちんと民主主義が機能しているんだと思いました。

若者を取り巻く社会問題にまっすぐ向き合い、日々活動している方々にたくさんお会いして、改めて当たり前のことに気が付きました。どの活動もこの問題だらけの社会を少しでも住みよくするために活動していて、活動がこの社会に必要で、なくてはならないからやってるんだということです。また、どの活動も「社会をよくしたい」という思いを共有しているから、どこか根底で繋がっていて、連帯し協力することでもっと力が大きくなれるんだと思いました。そこには政治の軋轢とか自分の利益がどうか難しいことは何もなくて、ただ純粹に希望しかないんだと思いました。

革新パークの中にある事務所で青年の支援を行なっているクリキンディセンターという所で聞いた「クリキンディ」という名前の元になっている南米の昔話が心に残っています。

ある日、山で火事が起きました。その時、多くの動物が逃げる中、クリキンディという名前の世界で一番小さいハチドリだけが、山火事を消すために小さい体で水を何度も何度もひとりで運びました。他の動物がなにをしてるの?と聞くと、

「自分は自分のできることをするだけだ」とクリキンディは言いました。

一人一人の力は小さくても、より良い社会にしようという目的を持った人たち全員が、自分のできることをすれば、力はとても大きくなります。

私たちYECも社会を良くするために活動している団体のひとつです。私たちも一步一步地道に頑張り続けることが必要だと思いました。私たちのやっていることは間違っていないと視察を通して感じました。

大林采奈

この視察では多くの施設を訪れ、沢山のひとと交流をすることができました。その中で私は韓国の若者が社会を変えたということが強く印象に残りました。それを特に感じたのは、無重力地帯ヤンチョンです。

無重力地帯ヤンチョンでは、政治に関心を持ち、自分事のように考え自分の意見を持ち、自分の声を社会に届けようと行動している若者の姿勢を強く感じました。これは日本の若者と大きく異なる姿勢だと思いません。日本の若者が政治に対する関心が薄れている現実を改めて感じました。しかし、韓国も光州事件で若者が立ち上がり自分の思いを大切に、行動するようになった過去をきっかけに、社会も若者の意見を拾うようになったそうです。この過去から私は、今の日本社会の若者に対する見方を変えるには若者自身が変わっていく必要があると思いました。そのため、日本の若者はまず自分が社会に対して抱いた疑問や不満を大切にすべきだと思います。「自分一人が思っても社会に何の影響も与えないだろう」と感じる人も少なからずいるでしょう。私も韓国視察を行う前は、正直そう思っていました。しかし、それでは今の現状のまま

何も変わらないんだと思います。自ら社会に働きかける行動を身近なところからしていくことが大切だと思いました。それに伴って今の社会が若者を見る目に変化が生じると思います。日本ではYECが行っている活動に対して理解され難いところがあり、若者が自由に自分の好きなことができる時間を手に入れるのが難しいように感じます。しかし私たちも社会に発信し続けOBOGの方や私達が感じた思いをより多くの人に理解されるように活動を行い続けようと思いました。

そして、日本の韓国との関係が深刻になっているという報道がまるで嘘かのように、実際に訪れてみると視察先の方や出会った方は、私達を温かく歓迎してくださりました。耳に入った情報が全て正しいと思わず自分で判断することが大切だと身をもって感じました。

今回の視察に協力してくださった全ての方に感謝を伝えたいです。そして自分たちの活動に誇りを持ち、活動を行っていきたいと思います。

大谷好恵

始めにYECに所属していない私を視察に誘い、受け入れてくれたYECの皆に「ありがとう」と伝えたいです。私は韓国のことを学ぶというのが大学進学をした理由の一つでもありました。そんな私にとって今回の視察は観光で行くだけでは見えないであろう韓国の姿を知ることが出来た数日間でした。数日間だったけど、一生の宝物となる経験でした。

私が印象に残ったのは韓国の中に見えた日本の姿です。韓国のお店では日本の商品がたくさんあったり、日本語を話せる店員さんがいたりといったこともそうですが、視察した団体でお話を聴くと日本の団体や地域、個人の名前がたくさん聞こえてきました。革新パークの中のクリキンリセンターでは福島県産の綿とパークで育てた綿を使って作品をつくるという交流が東日本大震災以降ずっと続いていたり、青年ユニオンでは日本の「なかまユニオン」という団体と連携していたり、ハジャセンターでは日本の教授から持続可能な住居の仕組みを学んで建物を作っていたり。日本と韓国は距離的に近いからこそ今までの歴史上色々なことがあったのだと思います。以前ある人から「隣国同士は仲がいいというのはあまりない」と言われたことがあります。確かにずっと仲が良いというのは難しいのだと思います。だから日韓関係も情勢が常に変化しているのだと思います。でも例えそうであっても変わらない人と人とのつながりはあるんだと、強く感じました。近いからこそ先に挙げたような日本と韓国のつながりがあるのだと思います。今回見たのはきっとほんの一部で、もっと色んなところで「人と人」とのつながりがあるのだと思います。過去最悪とも言われる日韓関係ですが、そんなときでも「思い」はずっと続いていくのだと感じました。

視察前の私の韓国の若者のイメージは就職難で大変なんだというものでした。どちらかというと辛くて苦しい若者が多いのかなというイメージでした。しかし様々な団体を視察する中で、自分の興味のあることに取り組む若者、それができるようサポートしている人々、若者の悩みを解決しようと活動している若者自身、皆が前向きな様子が見られました。自分たちで社会を変える、変えられるのだという思いがあるのだなと思いました。自分のやりたいことを応援してくれる人の存在は若者、

子どもたちの心を温かくすると思います。私は普段所属する団体の活動で子どもたちと過ごしているので子どもたちを応援する人でもあるし、社会で色々な悩みを持つ一人の若者でもあります。そんな私が社会をよくするために、皆が過ごしやすい環境にするために、できることって何なのかという疑問を解くヒントが得られたような気がしています。

若者の住居問題に取り組むミンダルペンイユニオンの代表の方が「最終的には自分たちの団体がなくなるのが理想だ」とおっしゃっていました。これと同じ言葉を私は学習支援を行う団体の方からお聞きしたことがあります。活動の内容やアプローチの方法、取り組む問題は違っていても社会を良くしたいという思いは同じ、それは国や民族が違ってても変わらない「人の思い」なんだと思いました。

今回の視察はたくさんの人の「思い」に出会えた素敵な経験でした。

森友理子

まず、今回の視察を通して多くの方にお世話になり、応援していただいたことに感謝をしたいと思う。みなさんのお力添えがなければ、ここまで多くのことを学ぶことは不可能だっただろう。

韓国で社会をよりよくしようと活動されているみなさんとお話ししている中で共通して強く感じ取ったのは、「連帯の大切さ」である。特に強く感じた場面は、青年ハブとミンダルペンイユニオンへの視察だ。それぞれ活動ジャンルは青年の労働問題と青年の住宅問題である。この二つの組織は活動ジャンルは違うものの、共同で事務所を使用しており、お互いの活動を助け合っていた。お話を聞いている中で、団体としてのミッションはそれぞれ異なっても目指す先にはよりよい社会があり、それを達成するためにはお互いの存在が必要で、連帯して社会へアピールしていかななくてはならないということを感じた。

最近、日本でも韓国でも自己責任論が多くの場所で使われている。だが、静岡県立大学には、県大の社会貢献系サークルのコミュニティを応援するというものがある。この活動は何年も前からあり、年々有志によって引き継がれているものである。それは社会を良くする団体同士のコミュニティを作ることが大切だと信じる人たちがいるからだ。しかし、すべての団体がこのようなコミュニティを作ることに積極的というわけではない。身の回りのコミュニティを大事にしながら、より広くいろんな人や団体と緩く連帯していくことがより必要だと感じた。

また、県大以外の場で社会を良くしようと活動している人たちに沢山会ってきたが、学生だからと一線を引かれたり、ゆるくマウンティングされたりした経験がある。それぞれの分野でお互いがんばり、応援し合いながら、よりよい社会を協働して作っていくことが当たり前になるにはどうしたらよいのだろうか。大きな問いが残ることとなった。これからの活動を通じて考えていきたい。

油谷彩夏

私は今回の韓国視察を通して特に五つのことが印象に残りました。

一つ目は、韓国の都市開発についてです。私が想像していたよりもさら

に高層ビルが建ち並んでいたり、交通が発達していたりしていました。特に地下鉄とタクシーの数に驚きました。革新パークでみたおよそ十年間に渡る計画的な都市開発によって生み出されたのだと感銘を受けました。また、同時にそのように都市開発が進んでいく中でも昔からの伝統を守っている民泊や自転車の文化を広めようとする動きを感じ取ることができました。

二つ目は、若者や市民に対しての支援の数についてです。私は視察以前は今の日本の社会が当たり前だと考えていました。しかし韓国では私の想像を超えた様々な支援が行われていました。例えば企業への支援、労働者への支援、低所得層の市民への支援、自立を望む子どもへの支援、心に傷を負ってしまった人への支援などです。多くの団体が様々な人や企業を支えていました。どの支援も市民自らが問題意識を持ち生まれたものでした。私は常に問題意識を持っていくことが大切であると感じました。

三つ目は、支援を行っているなかで様々な協力が見られたということです。二つ目であげた様々な支援はそれぞれの団体が協力し合って成り立っているものでした。同じ施設を共有して利用したり、時には違う団体の人と話し合ったりしていました。私は日本では支援が行われていること自体が珍しく、感心してしまうのに韓国では支援を協力して行っているということに衝撃を受けました。

四つ目は、韓国では若者自身が社会に対して変化を求めたり意見を発信することが当たり前になっているということです。日本では社会に対して若者が不満を持ったり変えたいと思ったりしても、実際に行動に移すことは少ないように思います。そこにはそもそも発信する場所がないことや、人と異なることをすることへの躊躇や偏見や関心の欠如があるのだと私は思いました。例えば日本の選挙の投票率もその傾向が強く反映されていると思いました。「自分の1票だけでは何も変わらないだろう。」「そもそも政治にあまり興味が無い、わからない。」このような考え方が日本の若者の選挙の参加率の低さにあると思います。しかし、韓国でも最初から若者支援が充実していたり、若者自らが意見を社会に積極的に発信していたわけでないと感じました。ですからまずは日本の若者のそのようなネガティブな考え方を変えていく必要があるのだと思いました。

五つ目は日本と韓国の問題についてです。現在、日本と韓国の関係はとても深刻なものとなっています。日本では報道番組などで大々的にニュースをとりあげ評論家が様々な意見を主張しています。私は視察以前は日本での報道が全て正しいと思っていました。しかし、実際に韓国へと足を運んでみると事実は全く違うように感じられました。そこには日韓問題を感じさせない韓国の人たちによる歓迎や、日本語を学び日本文化に興味を持つ学生たちがたくさんいました。そのことから私は情報を鵜呑みにせず、実際に体験してみたり足を運んだりすることが今後日本と韓国が協力していくために必要になってくると考えました。

以上五つのことが私が韓国視察に実際に行き行って特に印象に残ったことです。全体を通してみても今回の韓国視察は私にとって本当に良い経験だったと思います。自分の今までの考え方を改めさせるものでした。今後自分が日本で生活していく上で今回の経験や学んだことを活かしてい

きたいと思います。

関文菜

私は今回の韓国視察で自分が思っていたよりも多くのことを学び、新たな考え方を身につけることができました。私が印象に残っていることは主に2つあります。

まず1つ目は韓国と日本の若者の考え方の違いについてです。韓国視察中に現地の学生の方々とお話をさせていただく機会があり、話の中で政治の考え方について特に顕著な違いが見られました。まず驚いたのは私たちが訪問した施設の一つであるソウルの無重力地帯ヤンチョンを利用している学生の方々と施設の方々全員がデモに参加したことがあると言っていたことです。「国民が政治に参加出来ないような政権で話が通じない、ねじ伏せられるような状態にありました。デモを通じて国民の考えが一つになることが大切なんです。私たちが行動しなければ変わらないんです。」と言っていたことがとても印象に残っています。選挙についても日本では若者の投票率の低さが問題になっていて、投票に行かない若者が多いという現状を伝えたらとても驚かれました。韓国ではほとんどの若者が投票に足を運ぶそうです。とは言っても元々若者が全員政治に関心があった訳ではなく、韓国前大統領の件があってから政治に関心がないと国が壊れてしまう、政治の実態について知らなければならぬという感情が若者の中に芽生え始めたそうです。

しかし、若者の政治への関心は地域差があるようで、ソウルから離れた光州でお話をした大学生はあまり選挙に行かない、自分が行ってもたかが1票だと言っていて日本の若者と近いものを感じました。

2つ目は韓国の若者政策についてです。韓国では若者に寄り添い、力添えをする政策や施設が多く見受けられました。例えば、韓国では若者が住居を借りることが難しくなっており、一人暮らしをするのが困難な青年住居問題が広がっています。それを助けるために住居相談を受けたり一般家賃より80%安く住居を提供し、一緒に住みながら独立していくことを助ける政策だったり、革進パークという1つの施設にそれぞれ違った役割をもつ250のチームがあり、1600人ものスタッフが常駐しているユースセンターがあったりと日本でもあったらいいのになと思う政策や施設をたくさん見ることができました。韓国で訪問した施設では助けてあげるという考えではなくて、寄り添って力になる、背中を押す、あなたの思うままにをやってみてというふうに、施設を利用する若者の考えや主体性が尊重されているように感じました。

今回の韓国視察を通じて私は日本では決して学ぶことのできない貴重な経験をたくさんすることができました。そしてユースワークだけでなく人として大切なこともたくさん学ぶことができたと自信を持って言うことができます。お世話になりました全ての方々に感謝を申し上げます。視察で学んだことをこれからのYECの活動に生かすと共に、これからの自分の人生にも活かしていきたいです。そして、今回の学びを社会にも発信していき、これからもYECとしてより良い社会を作るために活動していきたいと思います。

西尾圭織

私が韓国視察を通して特に印象に残ったことは2つです。

1つ目は若者の力を強く感じたことです。ソウル市では青年が自ら政策を考え、それを実現させる予算を設けていたり(青年自律予算)、毎月ソウル市長と青年団体の代表が話し合う機会があったりします。現地で話した大学生の多くが政治に関するデモに参加したことがあると言っていました。政治に関心があったり、デモに参加したりすることは自分たちも社会の一員であり、今の社会を変えていこうと思う気持ちの現れだと思えます。また、韓国の若者は、現状に満足せず、思ったことは社会に対して発信する力があると感じました。韓国は光州5.18事件を経て、若者の発言力が高まった歴史もありますが、その事件が起こったのも光州の青年・大学生たちが起こしたデモがきっかけです。若者たちが自ら社会に対して働きかけていくことで、社会の若者に対する意識が変わり、若者が持つ権利も変わっていくのだと思いました。私たち日本の学生や若者も今の社会への不満や疑問をそのままにせず、社会に発信して、変えていこうとする意識が必要だと思えます。そのためには、選挙に参加することはとても大事だと思いました。韓国の大学生の話では選挙に行かないことは恥ずかしいことだという認識があるようです。日本は若者の投票率が低く、せっかく持っている権利が行使されないことで、若者の意見を聞く環境が整っていないように感じます。若者の投票率が上がれば、若者政策に力を入れる政治家が増えるのではないかと考えます。若者一人一人が政治や社会に関心をもち、できることから行っていくことが大事だと感じました。

2つ目は人のあたたかさです。私たちが視察に行った時期は日韓関係があまり良いとは言えず、韓国に行くのは危険だと言われていました。しかし、実際に韓国で出会う人たちはみんな優しく、日本から来た私たちを丁寧にもてなしてくれました。韓国にいて、日本人への差別を感じたことは1度もありませんでした。韓国で複数の方から今の日本政府の日韓外交は好きではないけれど、日本人に対しては嫌いでなく、むしろ親しみを感じるとの声をききました。たとえ外交的に関係が悪化したとしてもそれは国の問題であって、国民を嫌う理由にはならないと強く感じました。光州青年センターThe森のセンター長さんがお互いに理解と共感し合えば必ず助け合えるとおっしゃっていました。その言葉を聞いて、国が違ったとしても今の社会をよりよくしたい願いは同じで、理解と共感があれば国を超えて助け合っていけるのだと思いました。日本は島国である分、大陸の国に比べて国を超えた交流が少ないと思えます。他の国との比較や国際交流をすることで初めて自国の問題に気づいたり、その国から学べることが沢山あり、いいことばかりだと思えました。特に韓国は地理的、文化的、歴史的にも日本と近く、参考になる面は多いと思えます。お互いに良好な関係を築いて、交流を続けていきたいと思いました。

最後に韓国視察をするにあたって多くの方々に協力していただき、本当に感謝しています。韓国での学びは日本ではできないものであり、私自身もYECとしても貴重な体験でした。今回学んだことを今後の生活やYECの活動に活かすとともに、社会に、多くの方々に発信していきたい

と思います。本当にありがとうございました。

松本成海

私は韓国視察を通じて印象に残っていることが2つあります。

まず、若者や市民に対する支援や政策についてです。韓国では若者や市民の状況や心情を理解した上の政策が多く見られました。その中で私が一番印象に残っている政策は、ソウル市青年政策ネットワークの取り組みです。この施設では「青年自律予算制度」というものがあり、青年自らが予算を決めて実行できるというしくみがあったり、若者自身がつくった政策を市に持ち込み、青年議会というものを実行できるしくみがあります。日本では、若者は問題を起す原因だけど、それを若者自身が主体となって解決することはできなそうだから、大人がサポートしなければいけない。このような前提があると思います。また、若者が問題提起をしても政策や事業として採用されることは少ないというような、若者が大人と平等に見られていない状況が多いと感じます。そのため、韓国では若者が市と関わりを持つことができたり、それを受け入れてくれる環境があったりすることに驚きました。青年自律予算制度では、若者自身が予算を決める場から参加できることでより意見が反映されると同時に、若者も大人と同じような立場として見られているという状況が伝わってきました。また、青年議会では、若者の社会参加の1つとなり、若者が主体となって社会の作り手となっているような気がして、YECのミッションとも共通点を感じ、日本でもこのようなものがあつたらいいと思いました。現在、日本では若者の選挙率の低下が問題となっていますが、青年議会のような若者が自分の意見や興味を持っていることを発信できる場があれば、若者も主体的になり自分の一言で社会を変えられるかもしれないという希望を持てると思います。そして、投票率の増加に少しでも繋がっていくのではないかと思います。今回、多くの韓国の若者政策について聞き、若者も主体的に社会に行動していくことの大切さ、それを通じて若者でも問題を解決できる力や行動力があるということを社会に発信していくことが重要であると感じました。

次に、若者の居場所、人とのつながりの場についてです。日本では、若者が気軽に集まれる場やお互いの状況や考えを共有できる場が少ないと感じます。また、そのような場に行くことはみんなと違うな、訳ありなんだな、などと当事者も周囲の人も思ってしまう、ネガティブになり笑顔が減ってしまう子が見られます。しかし、韓国では若者が一緒に遊んだり学んだりできる場が多くあり、その場自体がとてもあたたかい雰囲気包まれていました。また、当事者も周囲の人も明るく、生き生きした様子で日本との違いに驚きました。若者が気軽に集まり話せる場があることで、自分について何が好き、やりたいことなど探索できる時間が持て、色々なことに興味を持って動ける若者が増えるのではないかと思います。また、自分が抱えている問題をみんなと共有することで、自分の問題は社会全体としてでも問題であることに気づけ、一緒に解決していきたいという思いから主体的に行動できるようになるのではないかと思います。そこからまた人とのつながりの輪が大きくなり、人々が1つの目標を目指し連帯していけると感じました。日本でも、若者の居

場所やそこに行きやすい環境づくり、みんなと何でも言い合える場を増やしていくことが重要だと感じました。

この2つのことが印象に残ったことです。視察に行ったことで、日本との違いに驚き、日本の現状について考えたりそれを解決するためにはどうしたらいいかなどを考えるきっかけとなりました。日本に帰ってきて、学んだことを整理してみると疑問点が出てきてもっと学びたいという思いが強くなりました。これからのYECの活動や普段の生活で、学んだことを生かし大切にしながら過ごしていきたいと思います。

森俊輔

私が韓国視察を通じてとくに印象に残っていることは大きく2つあります。

1つは、韓国社会が若者政策においていい方向に変化できているように、日本社会だって変わることは必ずできる、と感じたことです。

2つ目は、YECのやろうとしていることは、かなり欲張りなことなんだなあ、と感じたことです。私たちYECは「すべての若者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手となるために」というミッションをかけた、「社会へのアプローチ」、「若者へのアプローチ」の二軸で活動します。そのこともあり、私はこの二軸に沿って考えてみました。韓国の若者へのアプローチで感じたのは、韓国の若者政策において重視されていたことは、若者の想像力を高める活動が多いように思い、またその過程で若者の内発的な意思を開花させようという意図を感じた、ということでした。革新パークを訪れた際には、若者に対して、ものづくり、芸術のアプローチ（写真、絵など）をとっている場所がたくさんあって、韓国の青年政策に一貫性を感じ、なるほどなあと思いました。若者へのアプローチで、もう一つ考えたことは、視察先の若者の社会とのつながりづくり、コミュニティづくりのやり方が興味深かったということです。とくに、光州青年センターを訪れた際は、チャクタンモヒム、青年モヒムというのがある、若者が集まってやりたいことを何でもストレートに応援しようとしている姿勢、また若者のコミュニティを大切にしようという思いを感じて、僕たち若者にとって理想的だなあと感じました。

韓国の社会へのアプローチでは、まず韓国では、市民活動、運動の影響力が強く、国民の意見が社会に反映されやすいということを知り、また視察先の方々のお話からそれを実感しました。それを受けて私は、韓国の行政と市民（若者も含めた）はとてもいい関係性にある、と感じました。

中でも特に印象に残っていることは、韓国の若者の政治への関心の変化を感じたことです。揚州無重力地帯ヤンチョンを訪れた際は、ヤンチョンの運営にかかわる大学生たちとお話を通じて、「ろうそく運動」がその大きなターニングポイントだということを実感できました。この運動は、若者が中心となって行われたデモで、ソウル市の多くの若者が参加したという話をしてくださいました。彼らの話からは「自分たちがリーダーを選んだ」「自分たちが国を変えた」という意識が今の韓国の若者の政治への関心を高めたことを知りました。これを受けて私は、今

の日本の若者にもきっと韓国と同じように社会を変えられる力がある、ということ強く思いました。

YECとして視察をしたことを初めてで、至らない点ばかりでしたが、韓国を視察してたくさんの新しいことを知れたり、YECの活動が国を越えてつながっていることを実感できて、私自身満足のいくものでした。この経験を今後のYECの活動、ひいては実生活に活かしていきたいと思えます。

八木健斗

私が、韓国視察を通して一番感じたことは韓国人と日本人との間に「行動力」の差が大きくあるということです。韓国視察で様々な施設を訪れ、様々な人と交流し、話を聞く中で韓国の若者たちはまず行動を起こすということを感じました。韓国の若者たち一人一人が率先して行動するから、そこで集団が生まれ、若者の権利を得るための大きな力となり今のように若者政策が充実するようになったように思います。日本の若者たちは、国にこうしてほしいと思っても他人に頼る傾向が強く、まして韓国の若者たちのように国に若者政策の予算案を自ら提出するということはほとんどないように感じます。また、日本の若者は韓国と比べて政治に対する関心があまりないように感じます。これは日本の若者が、自分には関係ない、他の誰かがなんとかしてくれるだろう、と他力本願になっている表れだと思います。このように自分がなんとかしよう、という行動力が日本にはあまりないから、日本の若者政策が全く充実してないと思います。しかし、これから韓国の若者たちが持つような行動力を日本の若者たちも持てば、必ず若者政策を充実させることができると思いました。だから、これからYECとして活動していく上で、まず自分から行動するということを心に留めておきながら活動していきたいと思えました。

保岡治樹

私が今回の韓国視察でもっとも印象に残ったことが二つあります。

一つは韓国の若者たちの行動力の強さです。韓国の若者は時の政権に不満があればそれをデモなどの行動に移し、自分たちの意思を示すことで社会に変化をもたらそうとします。実際に前朴槿恵政権は若者たちの呼びかけから始まったデモによって失脚しました。一方で私たち日本人の若者の多くは政治的な自己主張は好まず、デモへの参加はもとより選挙にさえ行かない人もたくさんいます。韓国の若者のように私達も政治的な主張を積極的に行うことが必要だと考えました。

もう一つは、韓国の若者だけでなく、韓国で出会った全ての人に当てはまることですが、政治とその他の問題を切り離して考えることができるということです。私が今回の韓国視察に出発する際、大学の友人やアルバイト先の大人の多くは「この時期に韓国に行くなんて危ない。」や「韓国で差別にあうのではないか。」という反応を示しました。しかし実際に韓国に行って感じたことは、韓国の国民は日本の政治や政権に批判的でも、日本人に対して批判的な考え方をしないと政治と分けて考えているということです。これらも私達は見習うべき考え方だと、とても感銘を受けました。

以上の二つがもっとも印象に残ったことです。今回の韓国視察ではた

くさんの知識、考え方、価値観を学びました。そしてそれらを日本にいる人々に伝えていくのが私達の役目だと思い、今後のYECの活動がより充実したものになると思いました。

終わりに

今回の韓国視察から私たちは多くのことに出会い経験し、たくさんのことを学ぶことができました。韓国では日本と比較して若者支援が盛んに行われており、若者一人一人の社会を変えていこうという強い意志を多くの場面で感じることができました。今回の視察における新たな発見や学びをこれからのYECでの活動に生かし、社会に発信していけるように学び続けていこうと思います。

最後になりますが今回の韓国視察に協力していただいた視察先の皆さまをはじめ、この視察に関わってくださった全ての方に感謝します。本当にありがとうございました。

収支報告

収入 —— 収支	学生活性化 プロジェクト	Y E C口座	立替	個人負担	小計
通訳の方へ のお礼	43,000	7,800	6,000	63,200	120,000
視察先へ のお礼				53,800	53,800
ホテル代				160,000	160,000
飛行機代				184,800	184,800
民泊代 K T X代 高速バス代				92,296	92,296
小計	43,000	7,800	6,000	554,096	合計 610,896